

八女市文化財調査報告書 第8集

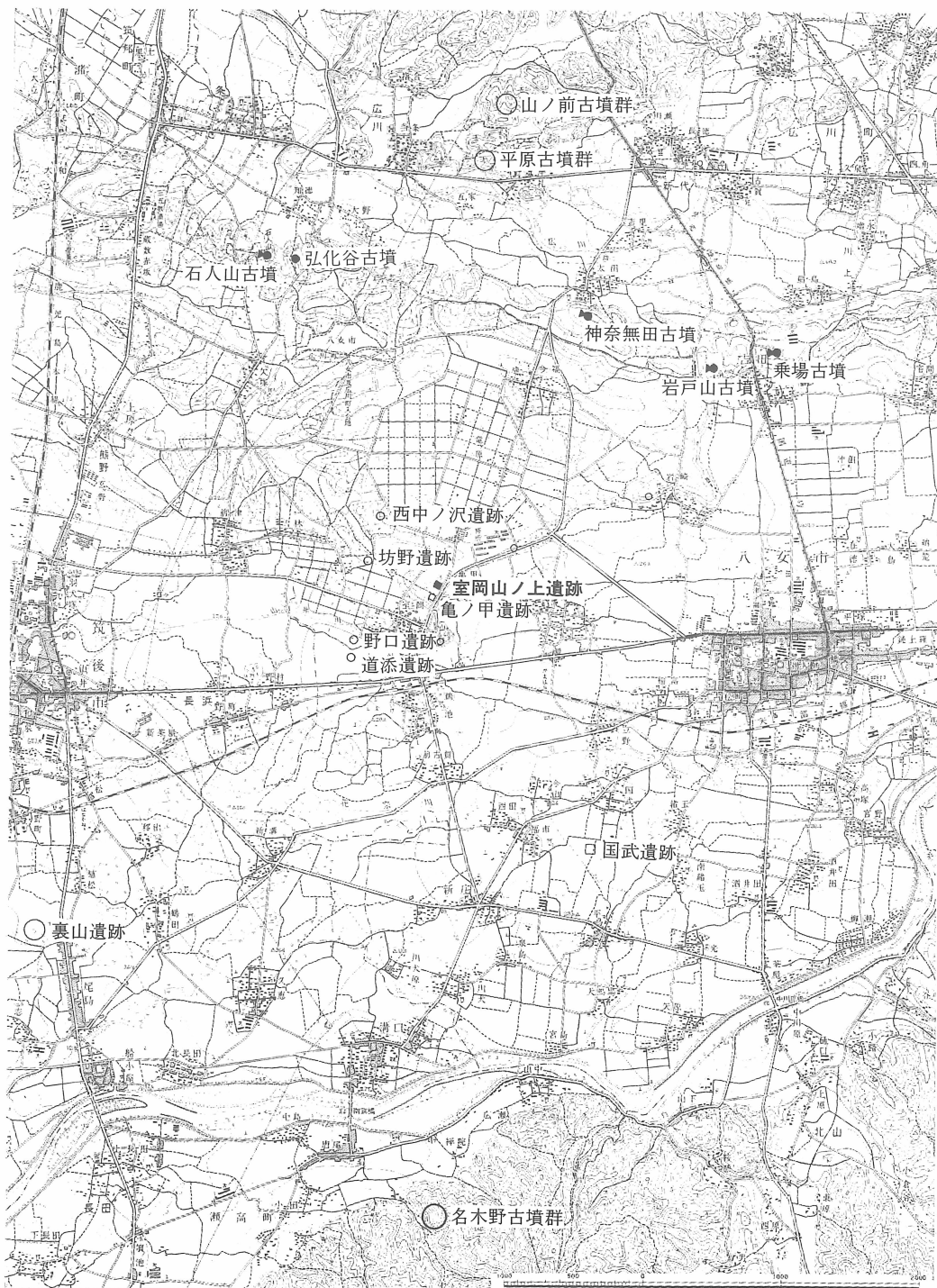
室岡山ノ上遺跡

八女市大字室岡弥生時代遺跡調査概要

1982

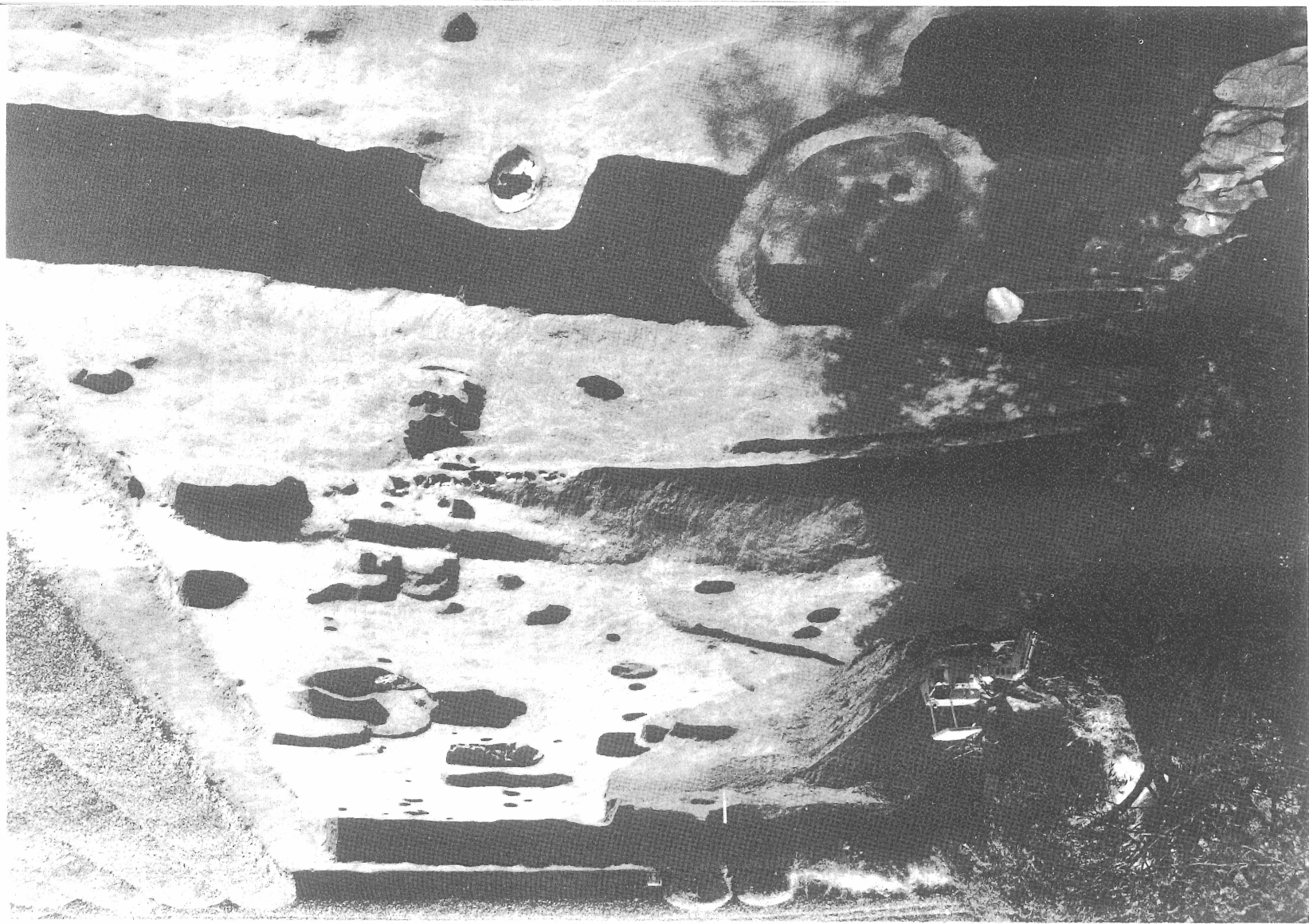
八女市教育委員会





■ 当該遺跡 室岡山ノ上遺跡

周辺遺跡分布地図 (1/50,000)



刊行にあたり

八女丘陵の室岡・亀甲地区については、昭和39年亀ノ甲遺跡調査が行なわれ、弥生前期の集落跡および弥生中～後期の墳墓群の存在が確認されています。

今回の調査については、土地所有者による土取り作業中に石棺等の発見があり、当委員会に連絡がなされたところです。

調査は、国・県の補助を得て県教育委員会および土地所有者の江崎光輝氏ほか関係各位のご指導ご協力により実施したところ予測以上の成果をあげることが出来ました。

調査結果については早急にまとめていただき、刊行できることになりました。この資料が亀ノ甲遺跡との関連および同地区の遺跡の広がりを知るうえで重要な資料になるものと確信するものであります。

なお、本書の刊行にあたり調査および原稿の執筆を担当された県教育委員会をはじめ発掘作業等をされた関係各位のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和57年 3 月31日

八女市教育委員会

教育長職務代行者 松 崎 友 衛

例 言

1. 本書は八女市が国・県の補助を受けて、昭和56年度に実施した八女市室岡所在遺跡の調査概要である。一応小字名をとって室岡山ノ上遺跡とした。
2. 掲載写真の撮影および実測図の作成については副島があたり、遺物整理は岩瀬正信氏、遺物写真は平島美代子氏、また挿図の浄書、遺物の実測等には、豊福弥生・平田春美両嬢の助力を得た。
3. 本書の執筆及び編集は副島が行なった。

本文目次

I. はじめに.....	1
II. 位置と環境.....	3
III. 遺構と遺物.....	5
IV. おわりに.....	32

I. はじめに

室岡山ノ上遺跡は、福岡県八女市大字室岡（字山ノ上）1031番地に所在する。

本遺跡の発見は個人の土取り作業中に甕棺・石棺が出土したことからはじまる。このことを通報受けた八女市教育委員会は県文化課に連絡し、文化財保護について指示を仰いだ。

それを受けた八女市教育委員会は地権者との協議を持ち、56年度国庫補助を受け、土取り作業にさしせまった330m²について、その範囲の部分について調査を行なうことになった。

調査主体は八女市教育委員会で、発掘調査は県文化課が担当した。

調査は昭和56年10月26日から11月20日までの約1ヶ月間を充てることとなった。

調査関係者は次の通りである。

調査主体	八女市教育委員会	教 育 長	今村 久信
	〃	社会教育課 課 長	松延 繁太
	〃	〃 係 長	山口 龍一
	〃	〃 事務史員	伊藤 周二
	〃	〃 〃	田中 博文
調査担当	福岡県教育委員会	管理部文化課 主任技師	副島 邦弘

なお調査では、福岡県教育委員会文化課調査一係長宮小路賀宏氏、同主任技師井上裕弘氏、福岡県文化財保護指導委員木附光男氏の指導と援助を受けた。また地権者の江崎光輝氏には多大の協力を受け、八女市在住の久留米市教育委員会の佐土原逸男氏には実測の協力を受けた。記して謝意を表わす。

なお、文化財保護思想の普及活動の一環として、11月14日の土曜日午後に現場説明会を開き150名の市民各位が参加された。



第 1 図 発掘前の状態



第 2 図 発掘風景

のこと

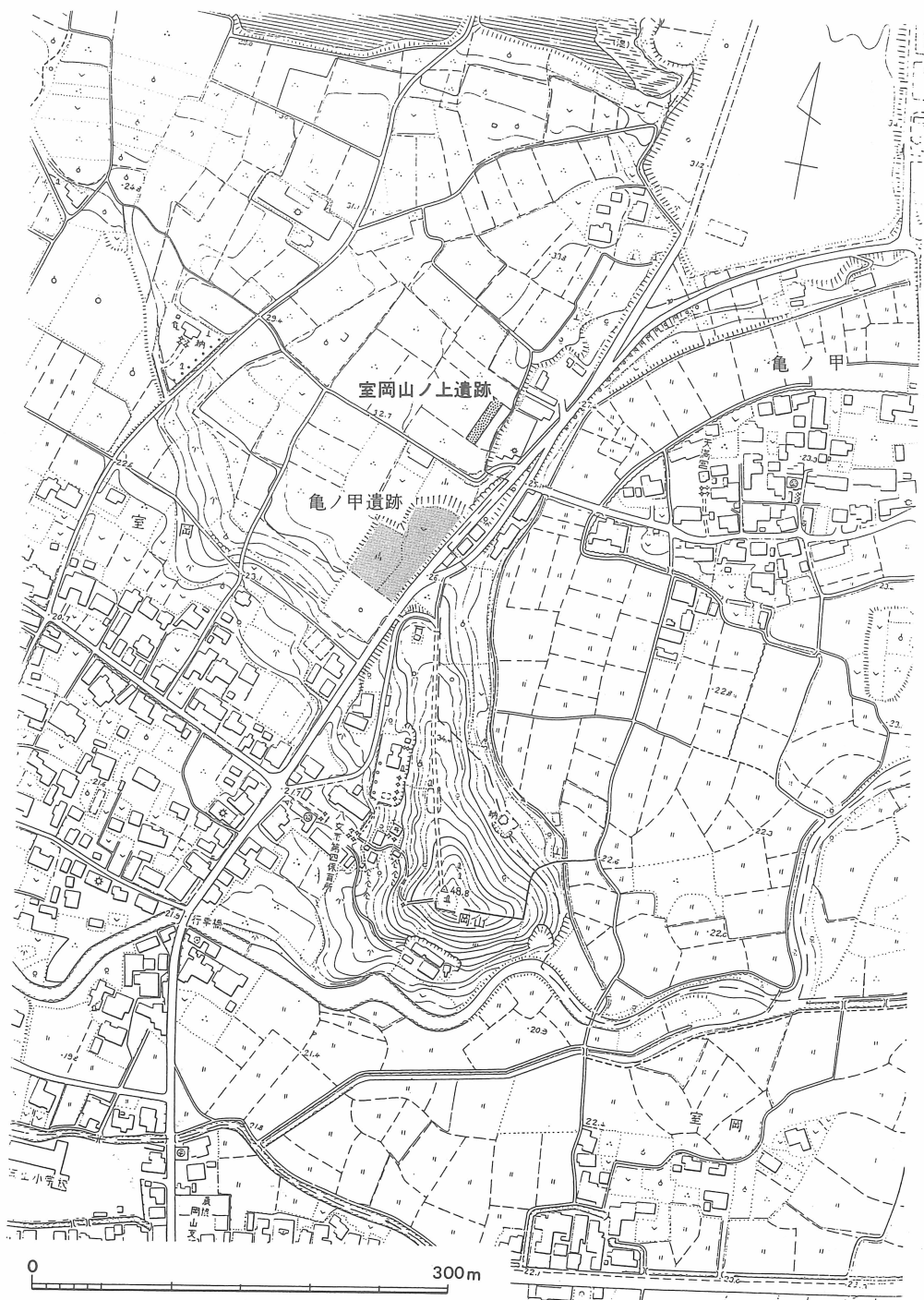
取り作

福岡

大の協

記して

を開き



第 3 図 室岡山ノ上遺跡付近地形図 (1/5,000)

II. 位置と環境

室岡山ノ上遺跡は八女市大字室岡1031番地にある。

この遺跡が存在する室岡地区は八女丘陵の東端でこの台地は、従来長峰丘陵と呼ばれ、八女・筑後両市の北部を東西に走っている。

当該地は八女市の北西に位置し、その西は筑後市前津に台地、低地を帯状に隣接している。この八女丘陵がその南へ突出した半島上の南突端に高さ44.8mの残丘たる竜頭山“岡山さん”がある。明治44年(1911)の陸軍大演習が展開された際の明治天皇の御野立所で、その頂点部は平坦で60m²ほどあり、足下に八女低地、北肩後に八女台地、それから北東にかけて、耳納山塊の南前方に赤藪山塊そして岩戸山古墳(註1)を残せる八女丘陵、その周辺地の八女台地を見わたす。東は八女低地をへだてて、遙か日向神、矢部の東部火山群、南方には、これまた八女低地の向う筑肥山塊が、北・西に断層崖を明確に示している。

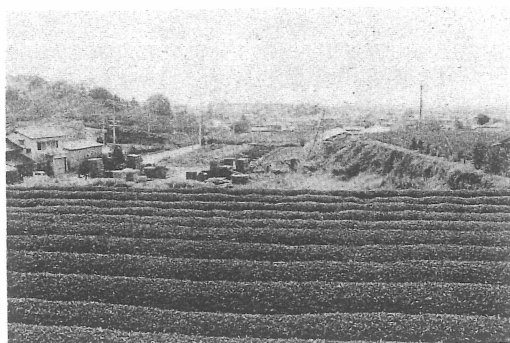
ここでは北縁近く山門郡瀬高町名木野古墳群(註2)、西縁近く女山神籠石(註3)、長谷古墳群(註4)、旧矢部川分流沿岸の大道端遺跡(註5)が知られている。

八女低地は、星野・矢部両川の複合扇状地をなして居り、室岡付近は、その西端に隣接している。

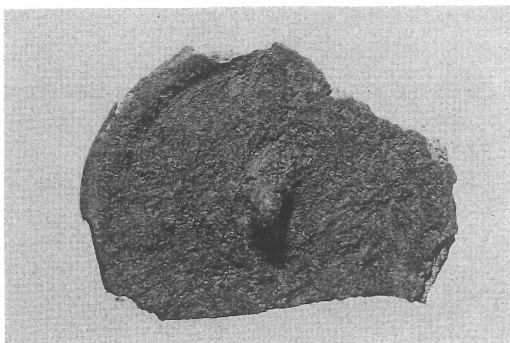
戦時中に当該地の北方の龍ヶ原に飛行場が出来その折りにもかなりの出土品があったという(註6)。当該地付近は八女茶の生産地で、一面茶畑がつづいている。

本遺跡の南側40mの地点が、昭和37～38年にかけて発掘調査された亀ノ甲遺跡(註7)である。亀ノ甲遺跡は、通称でその地番は、大字室岡607番地で、小字名は北小路と称されている。

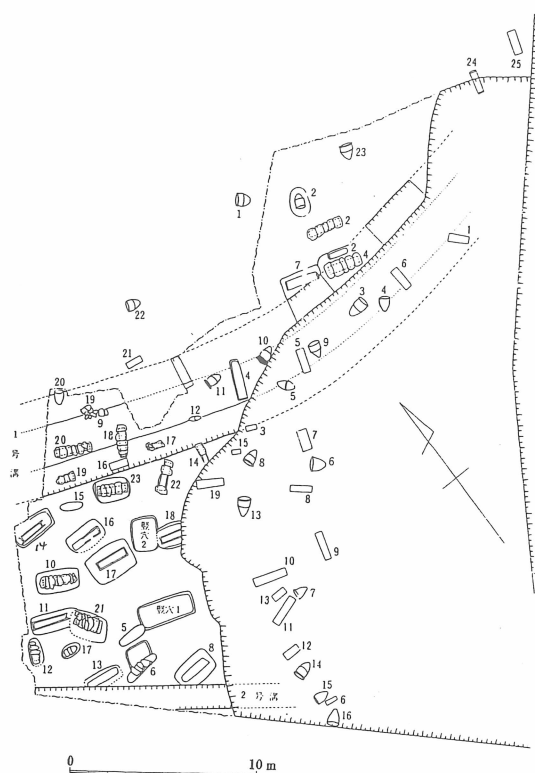
このことは発掘当初から理解されたと思われるが、その報告書の中でこのことについて記載されていない。昭和52年の『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XIX-』の「I.位置と環境」の中で、岩崎光氏が亀ノ甲遺跡の命名の由来を説明されている。それによると遺跡の所有者が東の低地の亀ノ甲に居住している人であること



第4図 亀ノ甲遺跡全景(S 37.38 調査地点)



第5図 亀ノ甲遺跡出土・鏡(小型仿製鏡)



第 6 図 亀ノ甲遺跡調査地区平面図
(S.38)(1/400)

から起因する。しかしその遺跡の拡がりは台地全域亀ノ甲に及んでいることはいえるわけで、今回山ノ上遺跡で検出された大濠は、亀ノ甲出土の大溝とつながる可能性を秘めている。

これらのことを踏まえて考えると、当該遺跡より西6~700m九州縦貫自動車道建設によって破壊された西中ノ沢・坊野・野口・道添遺跡(註8)では、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺構が検出されている。このことから“岡山さん”を中心に近接した地区が弥生時代の墓地群及び生活跡が検出されているわけで、室岡地区の遺跡分布については詳細な調査が必要となるだろう。

当該遺跡も亀ノ甲遺跡から40mしか離れていないということが、この亀ノ甲遺跡と一体のものであると考えられる。

註

- 註(1) 九州大学文学部考古学研究室編 『岩戸山古墳』 八女市教育委員会 1972
- 註(2) 村山健治 『女山長谷古墳群』 孔版 邪馬台郷土史会 1959
- 註(3) 国指定の史跡で、磯村幸男他 『女山神籠石保存管理計画策定報告書』 瀬高町教育委員会 1978
- 註(4) 新原正典・佐土原逸男他 『名木野古墳群』 瀬高町文化財調査報告書 第1集 瀬高町教育委員会 1978
- 註(5) 関晴彦編 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XIV-』 大道端遺跡 福岡県教育委員会 1977
- 註(6) 戦争中陸軍が建設した飛行場で、練習機用のものであったという。その道路建設によって弥生時代を中心とした遺物が山土している。その中でも亀ノ甲から出土した鉄戈が名高い。
- 註(7) 波多野皖三・小田富士雄・岩崎光・松岡史他『亀ノ甲遺跡』八女市教育委員会 1964
- 註(8) 西中ノ沢・坊野・野口・道添遺跡は酒井仁夫編は『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XIX-』福岡県教育委員会 1972

・掘りは
はいえる
れた大濠
可能性を

と、当該
車道建設
野・野口・
期から古
されてい
中心に近
び生活跡
区の遺跡
となるだ

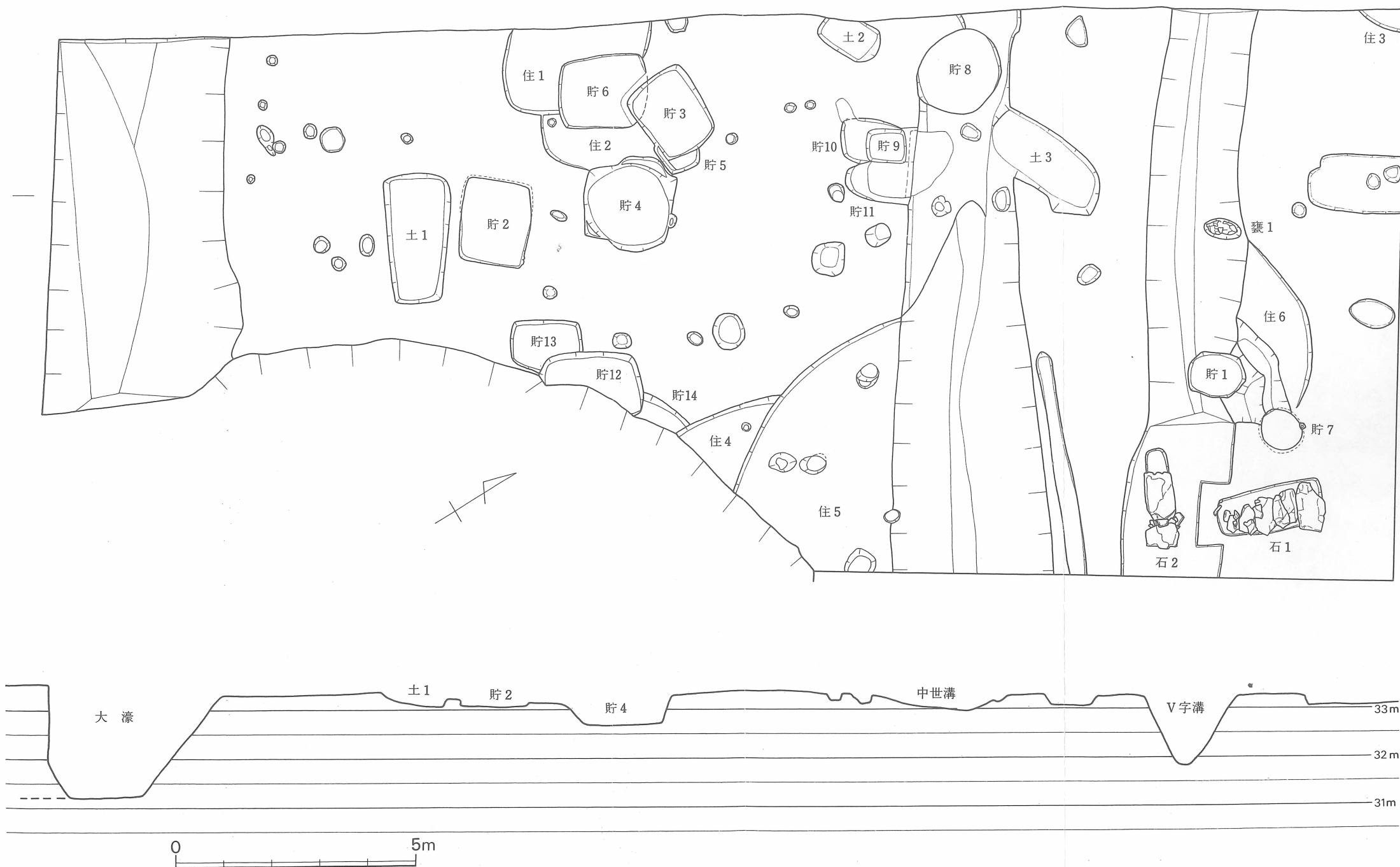
しか離れ
甲遺跡と

育委

頼高

よっ
が名

材調



第7図 遺構配置図 (1/100)

III. 遺構と遺跡

(1) 概要 (第7図・図版1)

竪穴住居跡と貯蔵穴及び溝を主体とする生活の場の設定と、土壙墓・石棺墓・甕棺墓を主体とする安住の場とか検出され、常世の生活と黄泉の生活との両面をとらえることができた。

今回検出された遺構は第7図で示した様に、竪穴住居跡6、貯蔵穴14、溝3、土壙墓3、石棺墓2、甕棺墓1とに集約される。

即ち、集落と墓地との関係である。

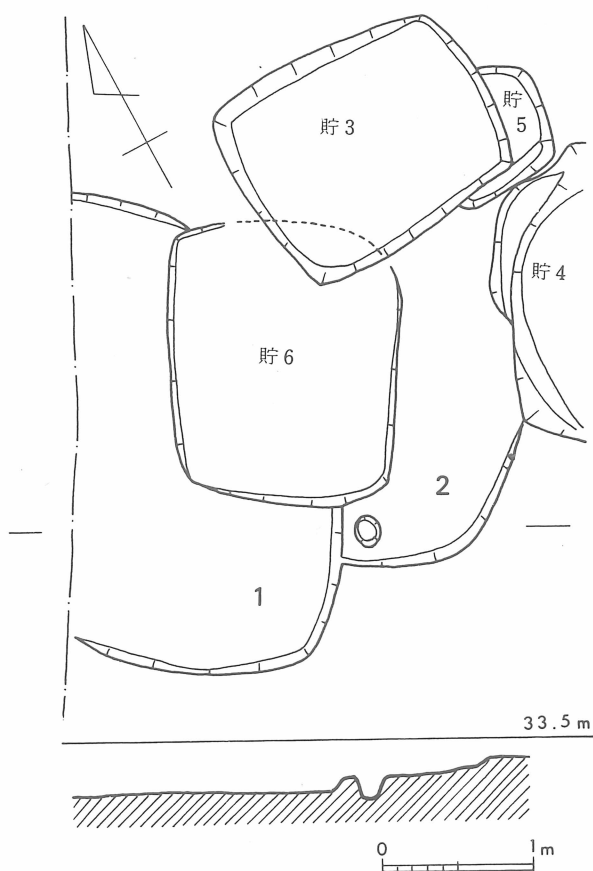
(2) 竪穴住居跡 (第7～9図)

1号竪穴住居跡 (第8図)

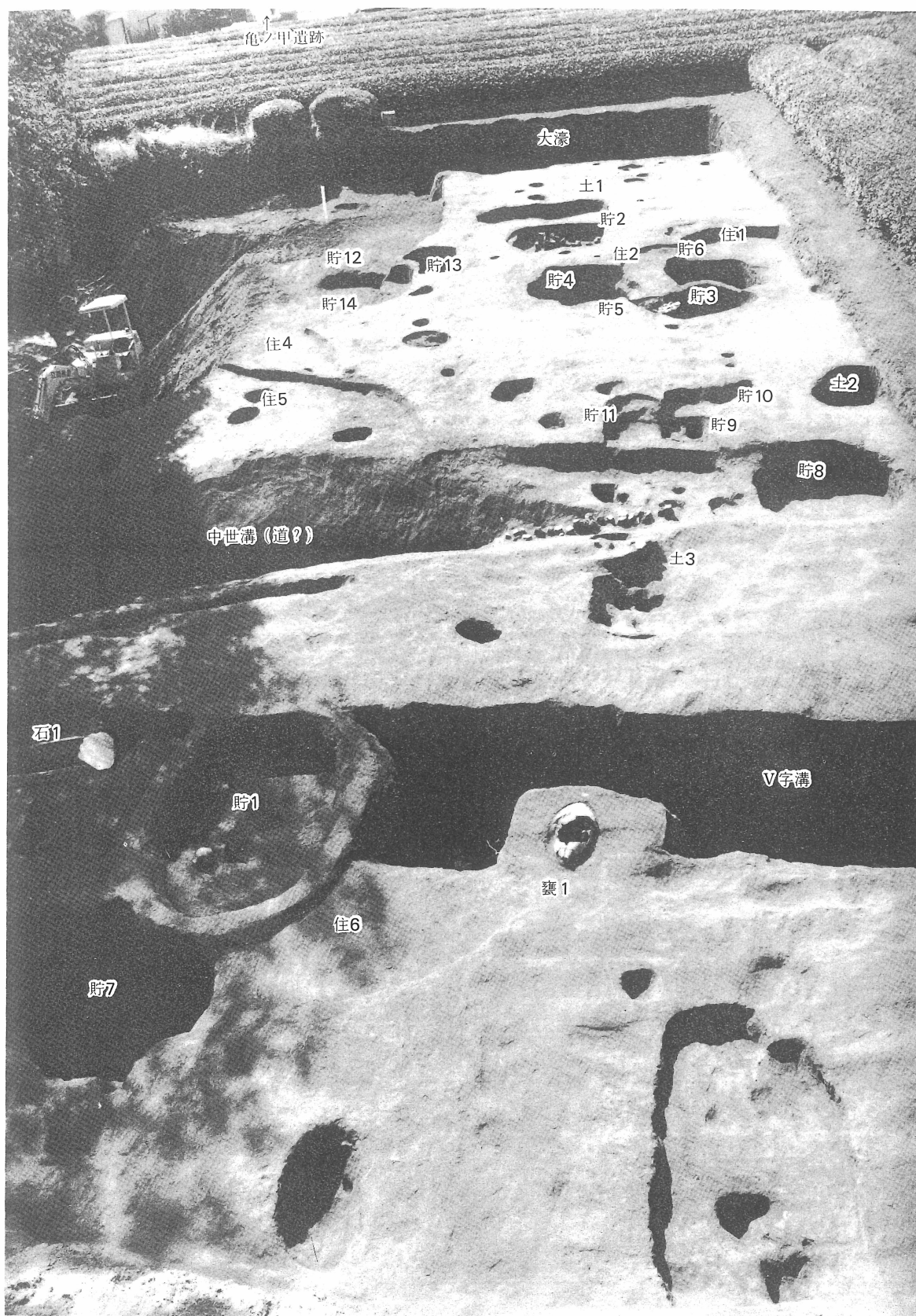
ほぼ中央部にあって全貌をつかむことができなかったが、平面形は隅丸方形を呈し、一辺が3 m弱で正方形に近い形となると思われ、この住居跡が2号住居跡を切っている。またこの住居跡の床面を6号貯蔵穴が切っている。床面には柱穴の位置を探しえなかった。周辺部の柱穴が伴うものと考えられる。壁高20cmで、壁の立上りもしっかりしていた。遺物は若干甕の破片が出土している。

2号竪穴住居跡 (第8図)

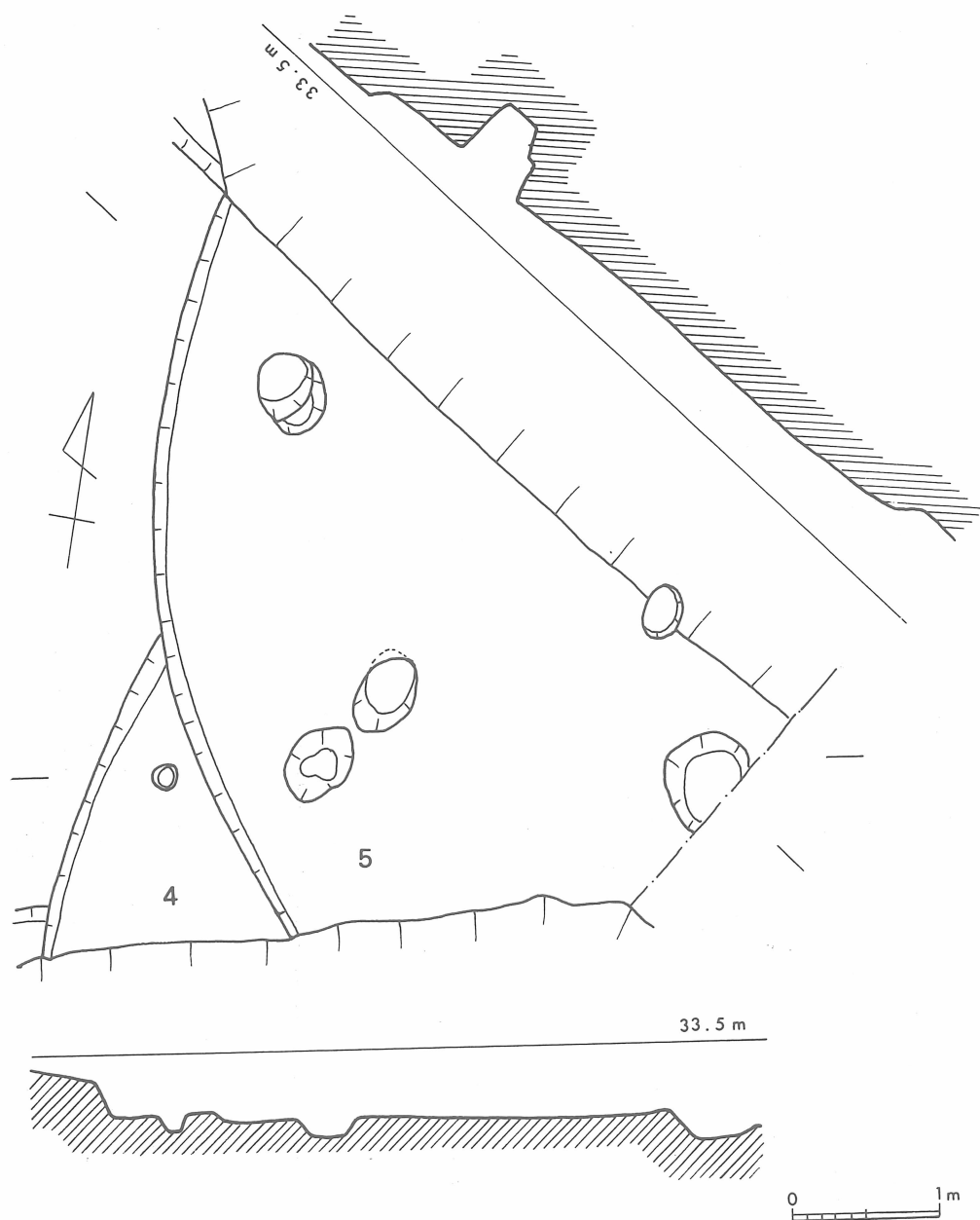
1号住居跡に切られて南東側のコーナーとそれに伴う柱穴を検出した。床面は4号貯蔵穴・6号貯蔵穴・5号貯蔵穴・3号貯蔵穴に切られているために、全貌を捉えることはできなかった。壁高は10cmで床面にいたっている。若干の遺物の出土がみられた。



第8図 1・2号住居跡実測図 (1/50)



室岡山ノ上遺跡発掘区全景



第 9 図 4・5号住居跡実測図(1/50)

3号竪穴住居跡(第7図)

発掘区の北西端に若干の端が検出されているもので壁高15cmと壁の立上がりは良好である。
遺物の出土はみられない。

4号竪穴住居跡（第9図）

5号住居跡の南側にあって、5号住居跡より切られているもので、その平面形も方形に近いものと推定され、全貌は不明である。柱穴が1個床面より検出されている。遺物の出土はみられなかった。

5号竪穴住居跡（第9図）

平面形は円形を呈し、壁高は20cmで柱穴を有している。この住居跡は直径6m前後を測り約 $\frac{1}{6}$ ぐらいしか残っていない。北側を中世溝によって切られ、南側を土取りによって削平されているためである。この住居跡は4号住居跡を切っている。壁の立上りはしっかりしている。遺物は甕形土器が出土している。

時期的には弥生時代前期末に位置付けられる。

出土遺物（第17図④）

甕形土器で口径21.1cm、器高24cm。胎土に細粒砂を含み、色調は煤けた感じの褐色を呈し、器面の調整は胴部下半は鈍いハケ目がみられる。口縁部に三角凸帯その直下に三角凸帯を二条持っている。凸帯には刻みを持っている。器形は弥生時代前期後半のもので、いわゆる亀ノ甲タイプのものである。

6号竪穴住居跡（第7図）

V字溝と7号貯蔵穴に切られているもので、その全貌は不明で、平面形は円形を呈している。直径4～5m前後を測るものと考えられる。遺物の出土もみられず、壁高は5～10cmを測る。

項目を新ためて年代及び切り合い関係を含めて説明を付加する。

(3) 貯蔵穴（第7・10～15・17図、図版2～4）

南側の大濠を境界として住居跡を中心に広がっているもので、ほぼ全域に広がる。

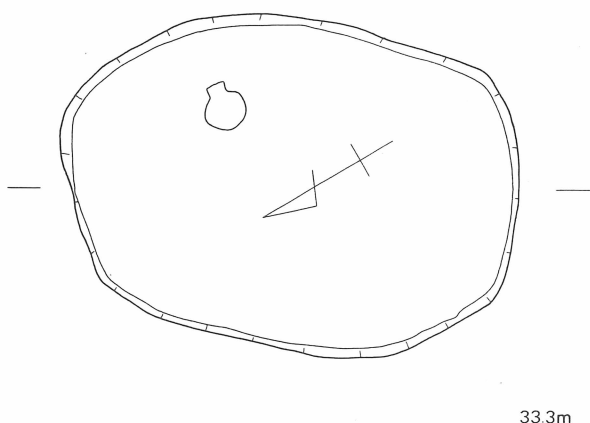
1号貯蔵穴（第10図）

平面形は楕円形を呈し、長軸2.40m、短軸1.70mで、深さ50cmで完形の壺形土器が床面より出土した。この貯蔵穴はV字溝が完全に埋没した以後に造られたものである。

出土遺物（第17図③）

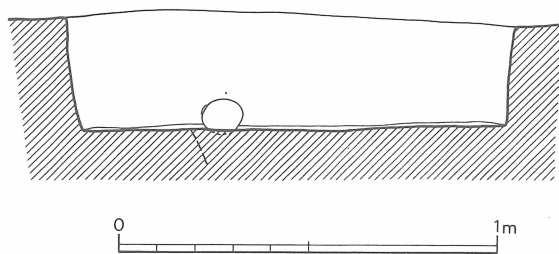
床面より出土したもので、口径8.5cm、底径8.9cm、最大胴径18.6cm、器高19.5cmで、胎土に

細粒砂を多量に含み、粗目の砂と金雲母を含み、色調は汚れた灰褐色を呈し、底部に黒斑がある。頸部直下にいわゆるへう記号状のものが刻まれている。器面調整は粗いハケ目が施されていた。胴部下半は板状のものでカキ取っているため、鈍い稜をもっている。内面もハケ目で内底面はナデ仕上げである。



2号貯蔵穴（第11図 図版3）

1号土壌墓の横にあって、平面形は長方形を呈し、長軸3.5m、短軸3.0m、深さ0.5mで、遺物が一括して出土してきた。それを原位置で示したのが第11図である。ほぼ床面より10~40cmの間に浮いた様な状態で検出されている。石器では砥石、土器では鉢・甕・甑等の器種が出土している。



第10図 1号貯蔵穴実測図(1/20)

出土遺物（第12図）

一応番号を付して上げたが、その土器の内分は甕口縁部5、甕底部8、鉢3、蓋1、甕転用の甑1、石器では砥石1等が出土している。

③・④・⑤は鉢形土器の完形品で、甕の底部は形態的に二種に分類できる。平底と⑨の様な上げ底である。甕形土器は口縁部及び直下に二条の三角凸帯を有するものと、口縁部に三角凸帯を一条有するものとに分けられる。甑は甕形土器を転用したもので二次的に穿孔している。壺形土器はないものと考えられる。土器の器面調整はナデ仕上げで、胎土に細粒砂や金雲母を含み、焼成は良好である。色調は黄灰色から褐色に近いもので、一部黒斑を有するものや、煤の付着をみる。石器は砥石(図版8-(下)2)で、硬質砂岩である。表裏面を砥石として使用している。

3号貯蔵穴（第7図）

平面形は長方形を呈し、長軸1.80m、短軸1.30mで、5号貯蔵穴を切っている。遺物は若干出土しているが、小破片だったので図示するにいたらなかった。

4号貯蔵穴
平面形
た。直径
切ってい

5号貯蔵穴
平面形
号貯蔵穴

6号貯蔵穴

3.3m

m

0)

転用の

の様な

三角凸帯

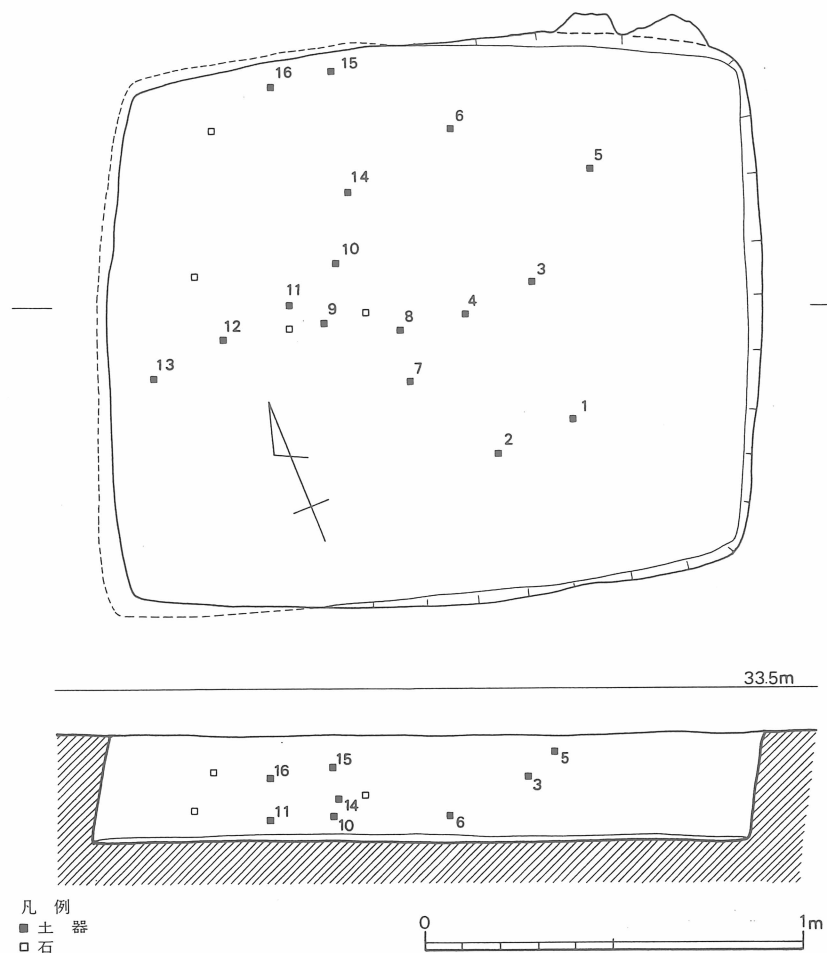
ある。壺

葉母を含

り、煤の

ている。

は若干



凡 例
■ 土 器
□ 石

0 1m

第 11 図 2 号 貯 蔵 穴 実 測 図 (1/20)

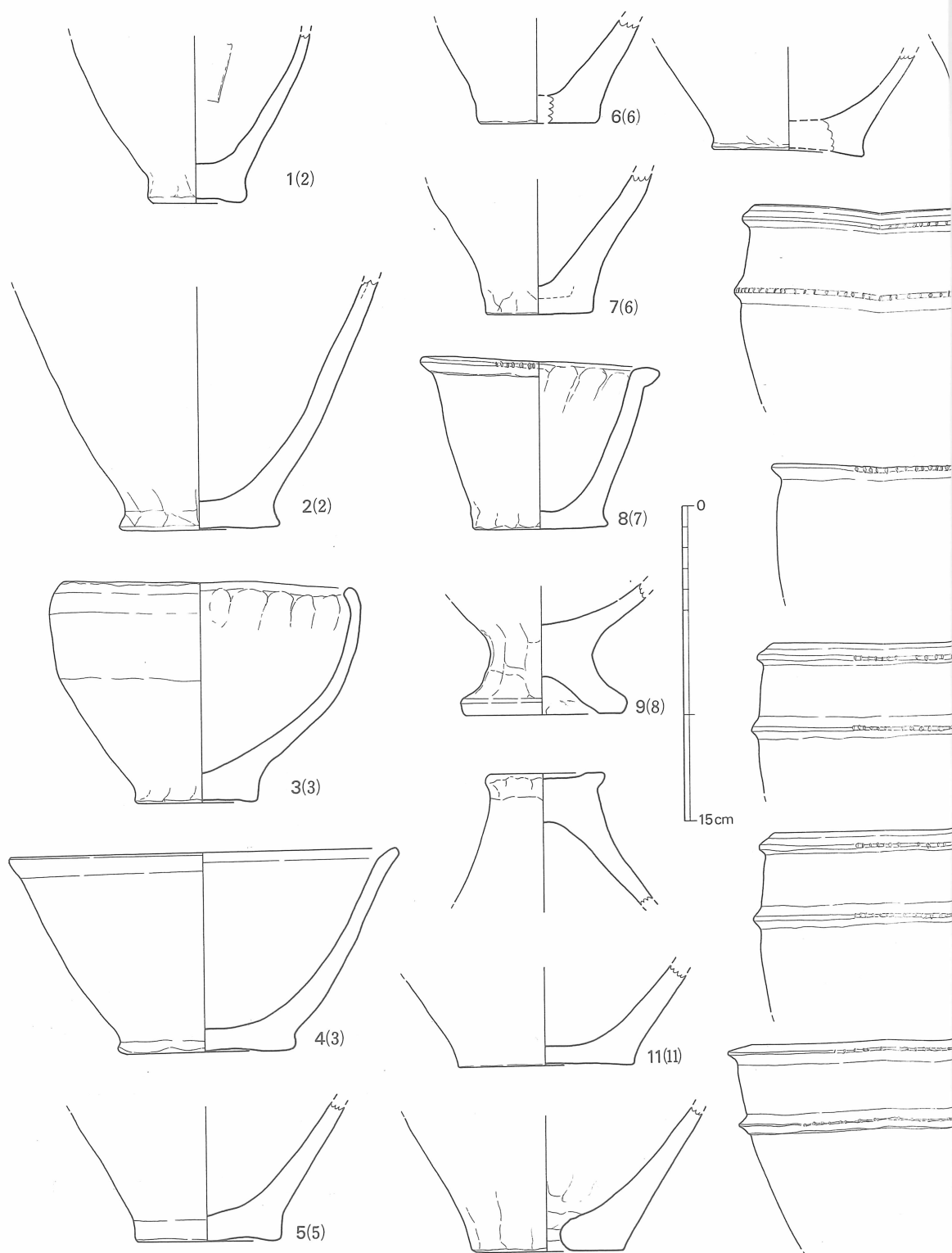
4 号貯蔵穴 (第 7 図)

平面形は円形を呈するものと方形のものが切りあっており、円形のを 4 号貯蔵穴とした。直径 2 m で深さ 60cm であった。遺物の出土はみられなかった。この貯蔵穴は 2 号住居跡を切っている。

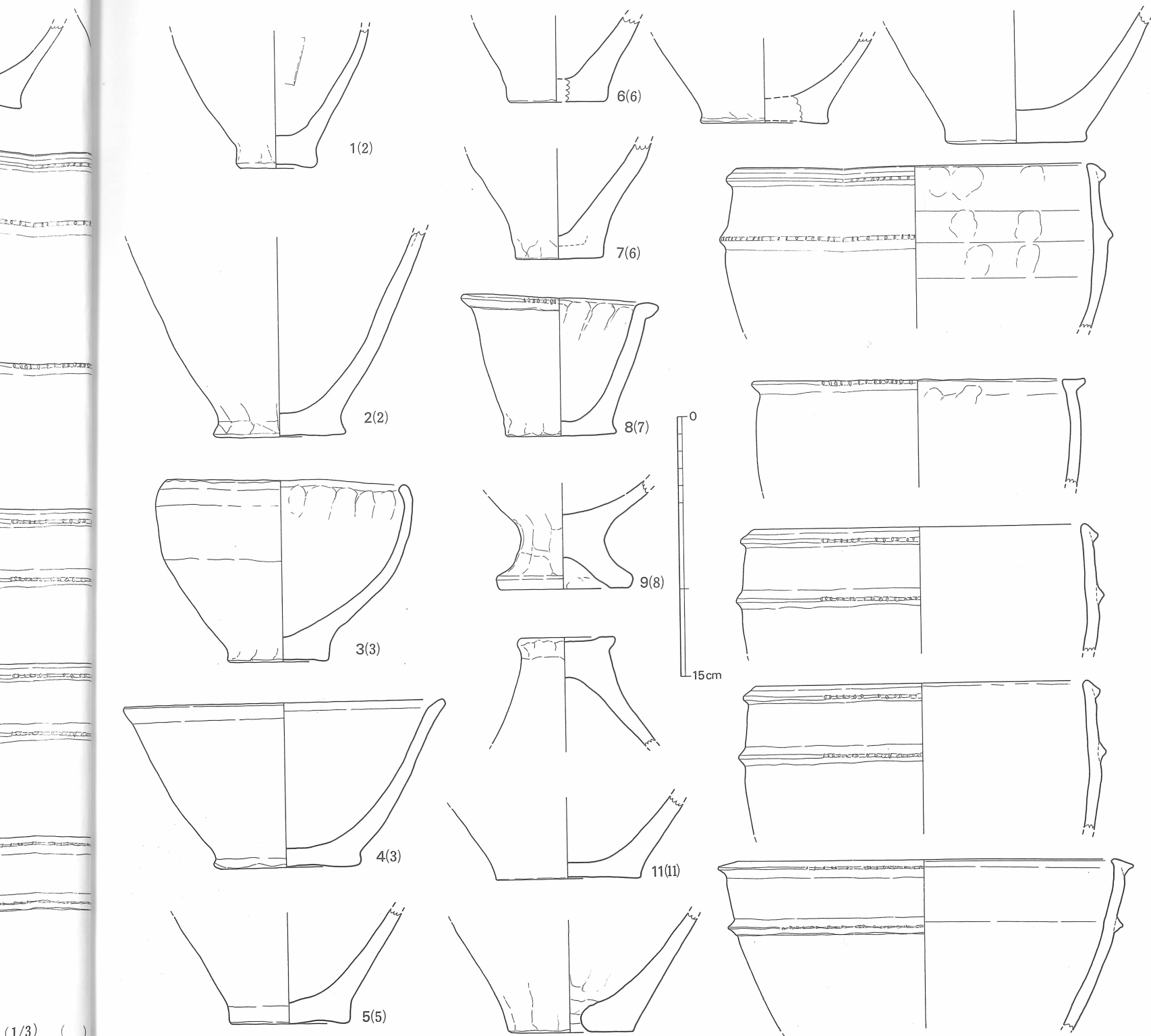
5 号貯蔵穴 (第 7 図)

平面形は一辺 80cm の方形を呈するもので深さ 10cm である甕形土器の一括が出土している。5 号貯蔵穴から切られている。

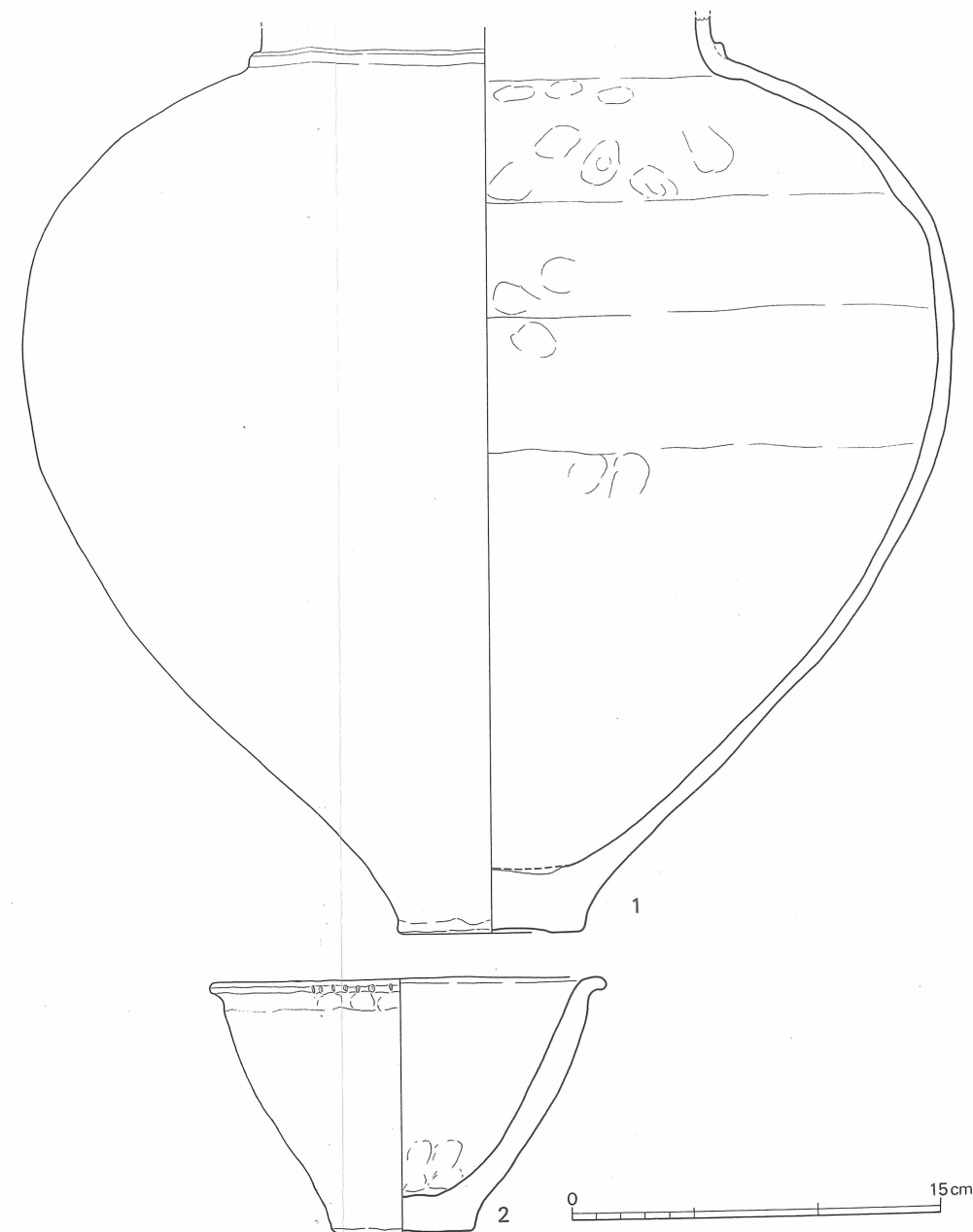
6 号貯蔵穴 (第 7 図)



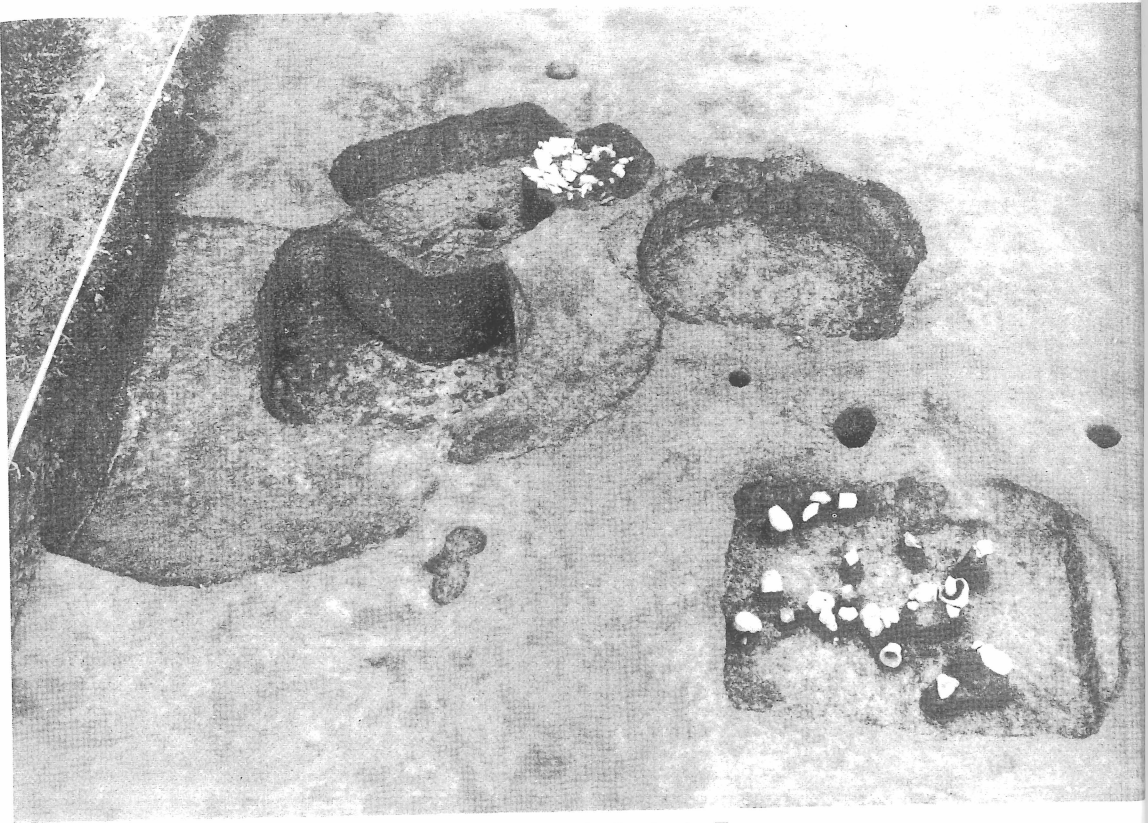
第 12 圖 出 土 遺 物 実 測 図 ① (1/3) () 遺物



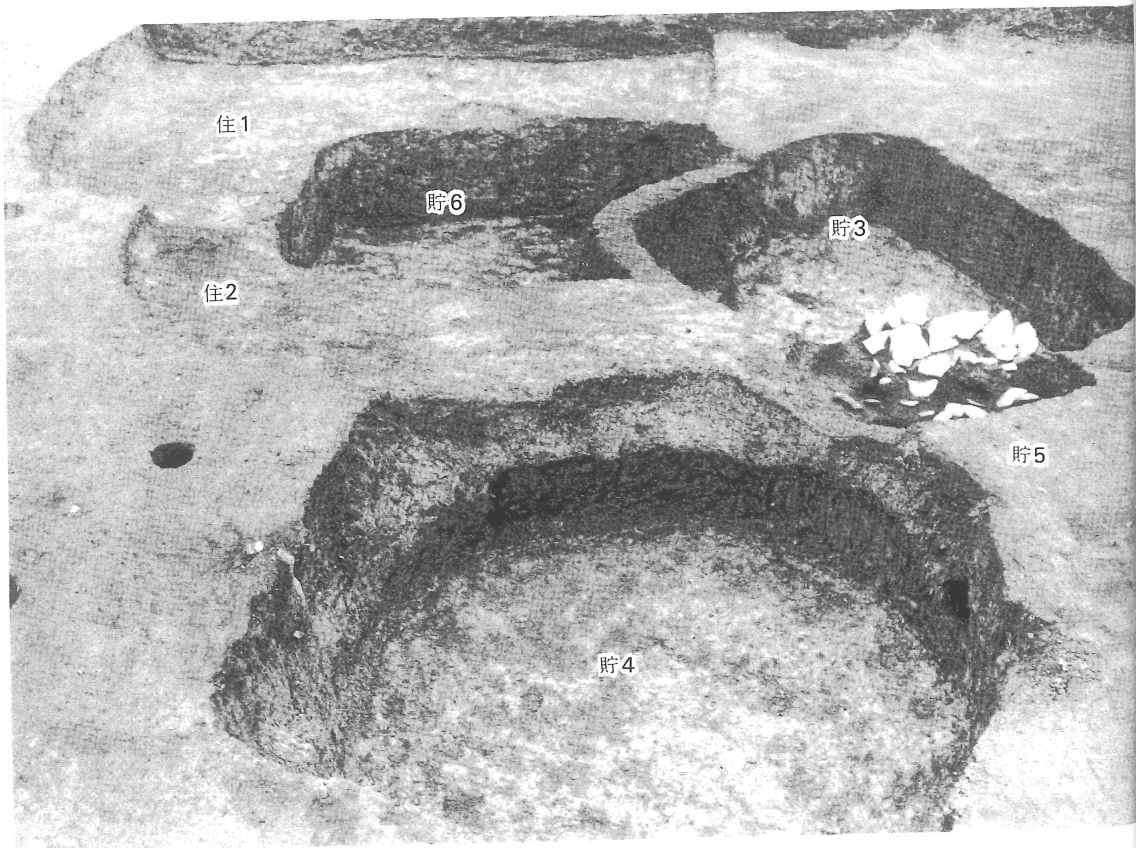
第12図 出土遺物実測図① (1/3) ()の中の数字は第11図の遺物番号と同じ



第13図 出土遺物実測図② (1/3)



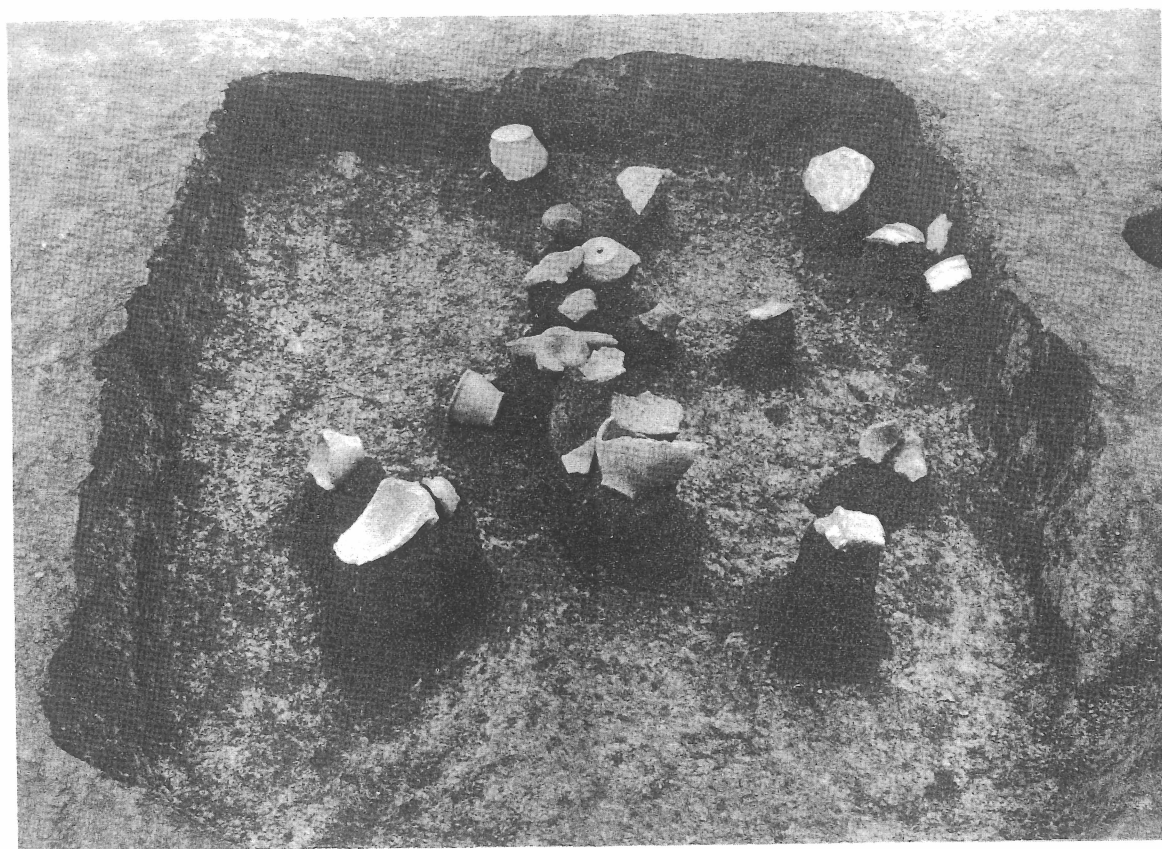
(1) 住居跡と貯蔵穴全景



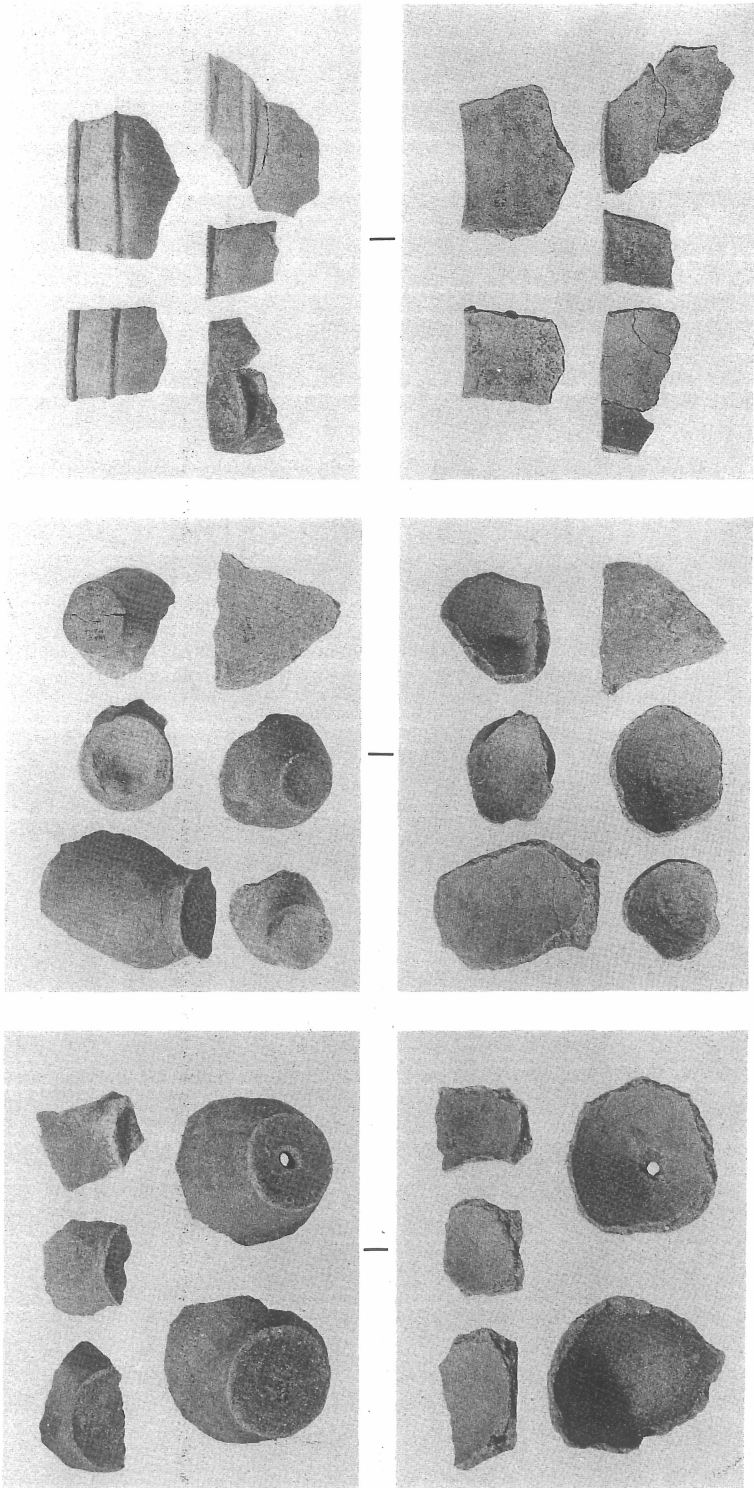
(2) 住居跡群と貯蔵穴群の切り合い状態



(1) 2号貯藏穴出土遺物



(2) 2号貯藏穴遺物出土狀態



2 号貯蔵穴出土遺物

平面形は隅丸方形を呈し、長軸2m、短軸1.4mで、深さ60cmを測る。3号貯蔵穴より切られている。これといった遺物の出土はみられなかった。

7号貯蔵穴（第14図）

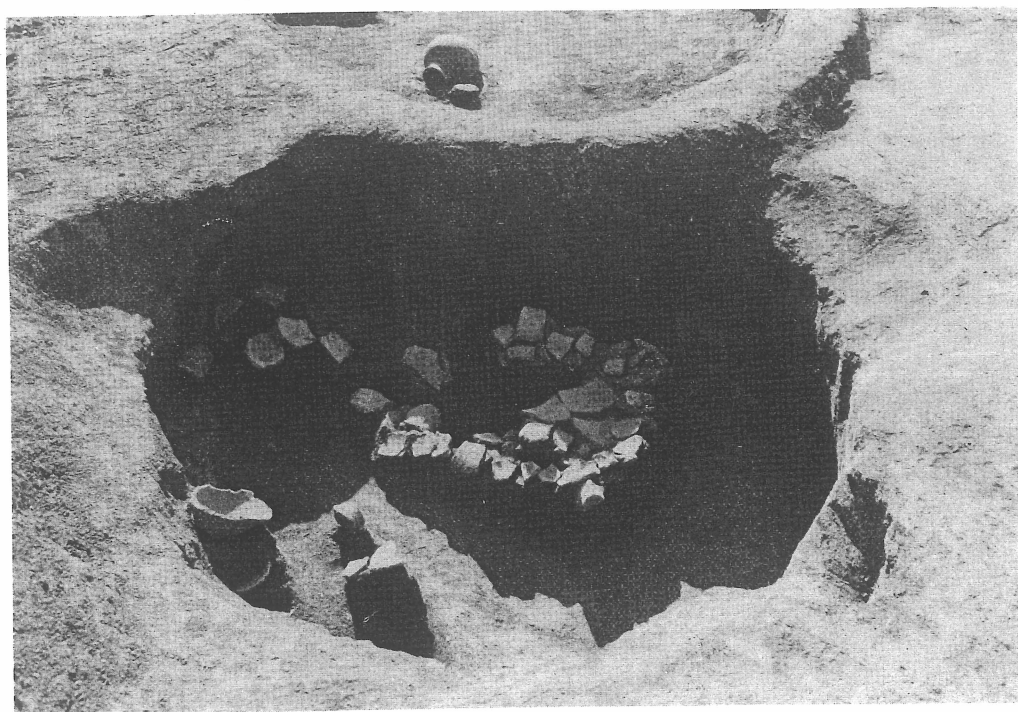
平面形は円形で直径80cm、深さ50cmで一括土器が出土している。覆土中より炭化物（イチイカシの実）が多量に採集された。出土遺物は床面より若干浮いた状態であった。6号住居跡を切っている。

出土遺物（第13図）

大型甕形土器と鉢形土器が出土している。

①は甕形土器で頸部と肩部の境いに三角凸帯を有し、最大径が38cmである。器面の調整は表面はナデで、内面の輪積の部分には指痕が残り、器面は凹凸がある。表面と同様なナデ仕上げである。底部は平底である。胎土に細粒砂を含み色調は淡褐色と外面は褐色を呈する。焼成は軟質で不良である。②は鉢形土器で、口縁部直下に刻目を施し、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色、口径14.8cm、器高10.2cmで平面で、器面調整はナデ仕上げ、内底は指痕が残っている。

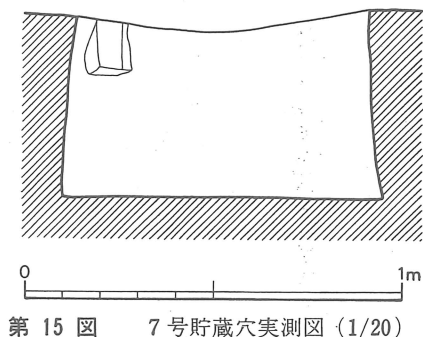
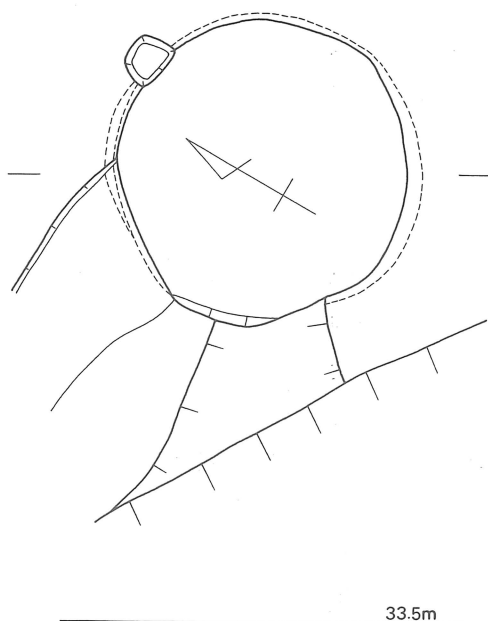
時期的には弥生前期末から中世初頭の所産と思われる。



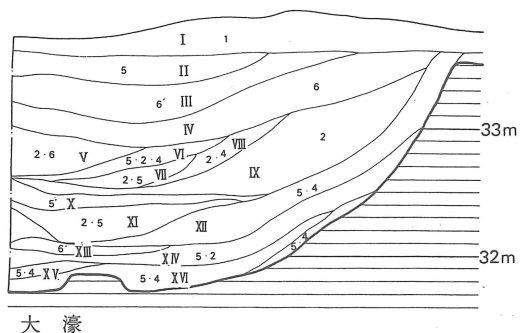
第14図 7号貯蔵穴近景（後方が1号貯蔵穴）

8号貯蔵穴（第7図）

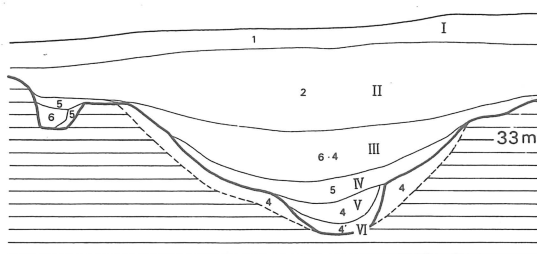
中世の溝で完全に埋まっていたが、平面形は円形で直径1.80m前後で深さ40cmを測る。遺物は出土しなかった。



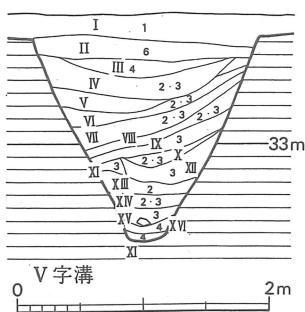
第 15 図 7 号貯蔵穴実測図 (1/20)



大 濠



中世溝



第 16 図 溝断面土層図 (1/60)

土層名

1. 耕作土
2. 黒色土
3. 灰黄色土
4. 黄色土
5. 褐色土
6. 灰褐色土

(4) 溝（第7・16～20，図版5・6）

南端に大濠，中央に中世の溝，そしてV字溝の3本の溝を検出した。

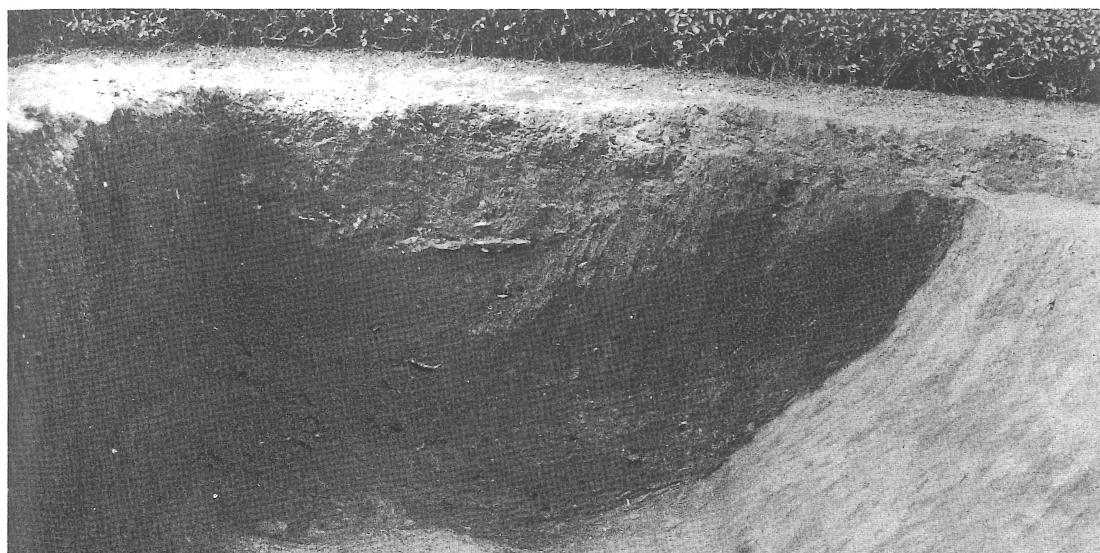
それを断面土層図に示したのが第16図である。

大濠（第16図，図版5）

南側の位置に東西方向に走る濠で，南側の肩は他の所有者の茶畑であるため，濠は3.5mの幅



◀大濠全景
(東から)



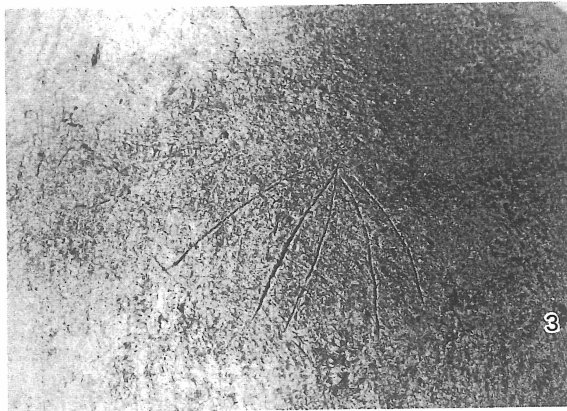
▼大濠断面



1



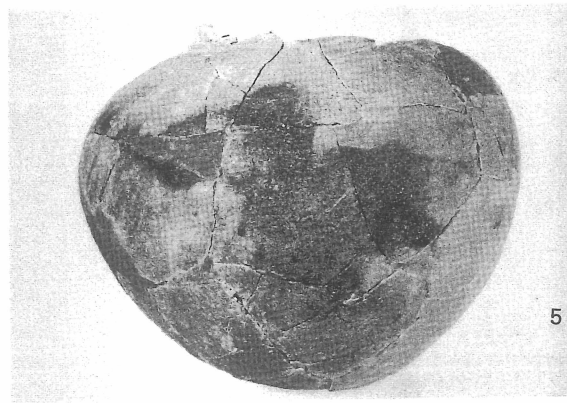
2



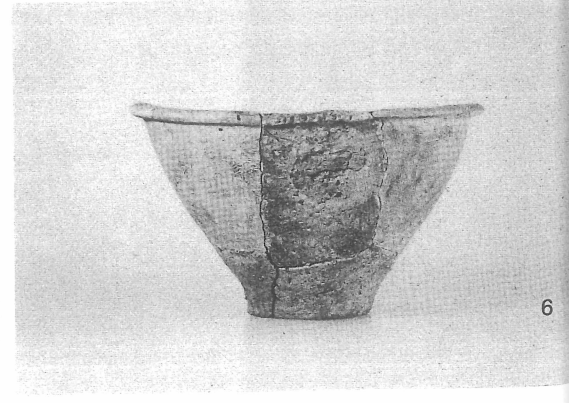
3



4



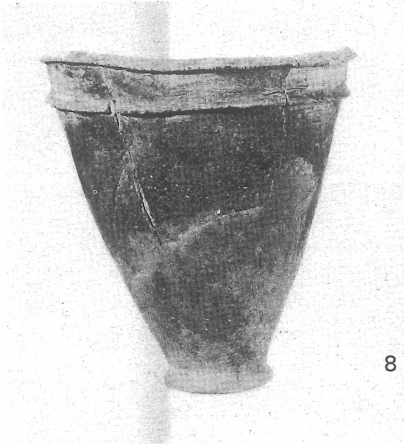
5



6



7



8

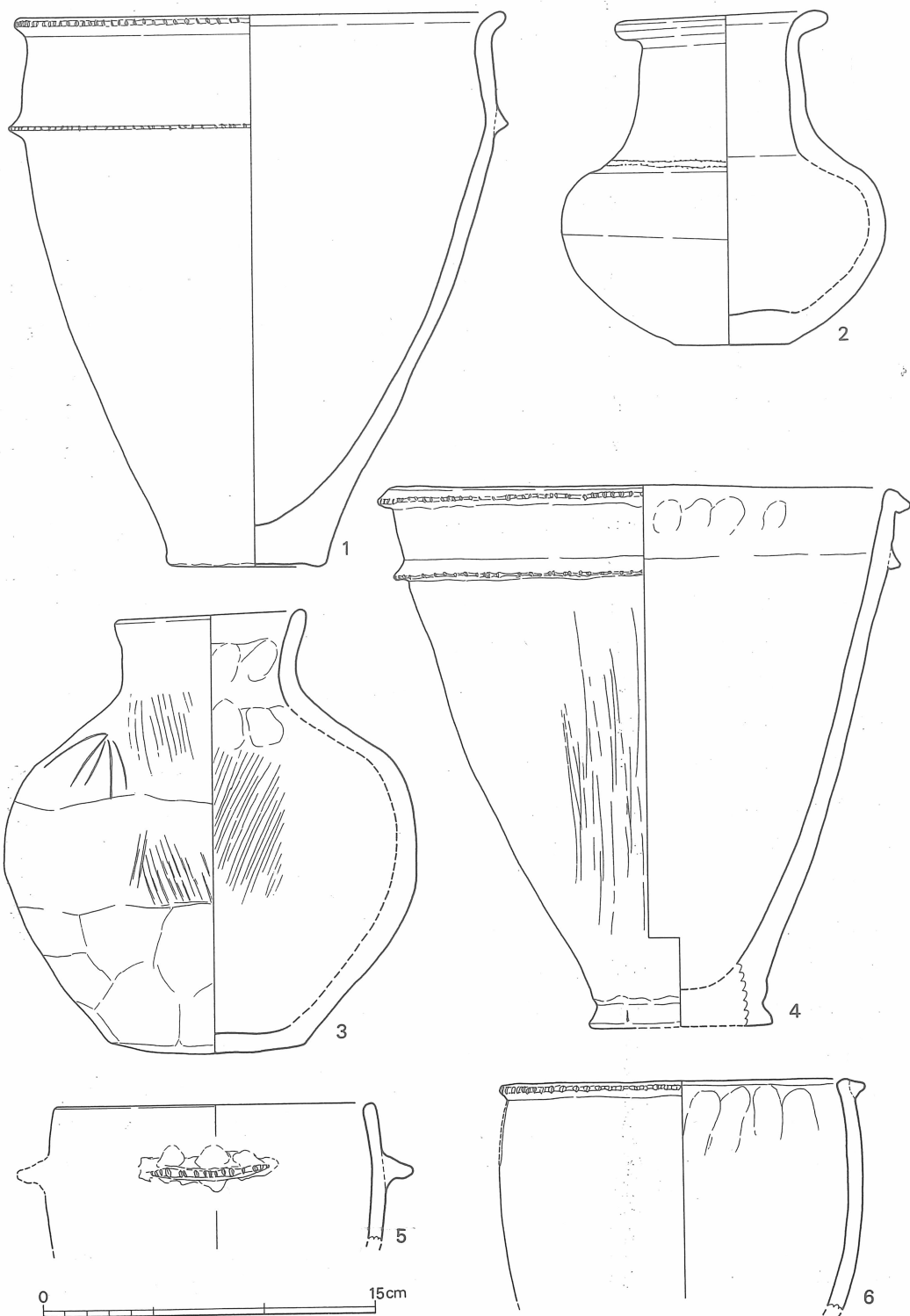
1. 壺 (1号貯蔵穴出土)
2. 壺 (大濠下層出土)
3. 1の肩部のへ記号
4. 2の肩部の列点文
5. 壺 (7号貯蔵穴出土)
6. 鉢 (7号貯蔵穴出土)
7. 甕 (大濠下層出土)
8. 甕 (5号住居跡床面出土)

2

4

6

出土)
土)
記号
文
出土)
出土)
土)
床面出土)



第17図 出土遺物実測図③(1/3)

で境界ぎりぎりの線まで調査を行なった。深さ2mで幅は約6m前後を測るものと推測される大濠である。この大濠は遺物としては上層面と下層面に分類できる。この濠から出土した遺物について詳細な分類については今後としたい。

出土遺物（第17図）

甕形土器はいわゆる亀ノ甲タイプの三角凸帯口縁部と直下に二条の凸帯をもつもので、④みたいなタイプのものが上層の主流をなしている。下層は①・②・⑥が出土している。①・⑥は甕形土器で、②は小型壺形土器である。甕形土器は如意輪口縁が主体を占めている。⑤は口縁部に三角凸帯をもち胴部の最大径が口縁直下にあるもので16.4cmである。①は口径21.7cm、底径7.2cm、器高24.1cmで、胎土に細砂を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色で胴下半は黒褐色である。器面調整は表面はハケによるナデで、底部はヨコ方向の雑なミガキがなされている。口唇部下端に刻目をもち、口縁部直下の三角凸帯にも刻目を有する。⑥は口縁径16.4cmで、胎土に金雲母を若干含み粗い小砂を含んだ粘土である。焼成は良好で、器面調整は剥離のため不明であるが、ナデ仕上げである。口縁内面には指痕がめぐっている。色調は黄褐色である。

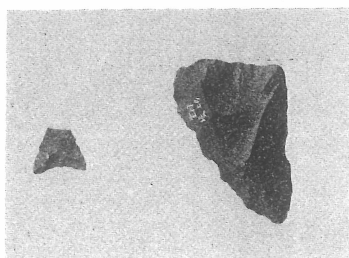
壺形土器の②は胎土に細粒砂を含み、焼成は若干軟質であるが良、器面に亀甲状剥離がはいっている。口径8.8cm、底径5.1cm、最大胴径14.6cm、器高14.7cmで、頸部下半による刺突に二条の烈点文がめぐっている。底部は円盤貼付である。器形からは板付Ⅰ式の古手のプロポーションをもっている。器面調整はナデ仕上げで色調は黄褐色である。

石 器（第19図） 砥石や磨石の破片と②は安山岩製の搔器である。

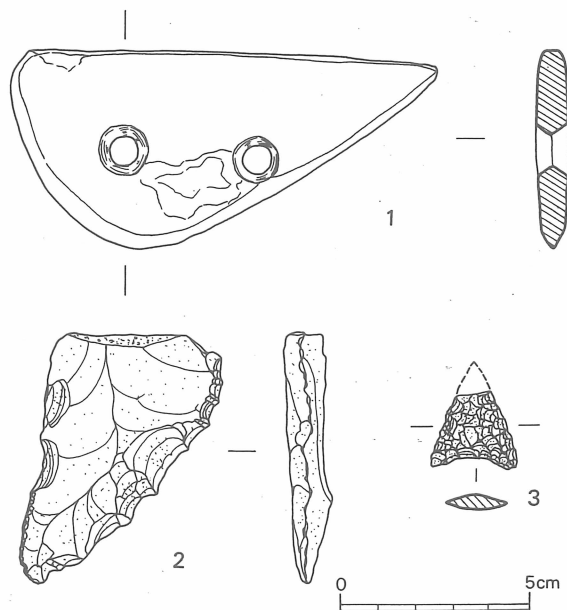
紡錘車（第20図） ④は石製品で半欠のもので、二条の沈線を有する粘板岩製である重量7.3g、他は土製品。⑤は重量26.5g、⑥は32.7gあり、重い方の部類にはいる。

V字溝（第16図）

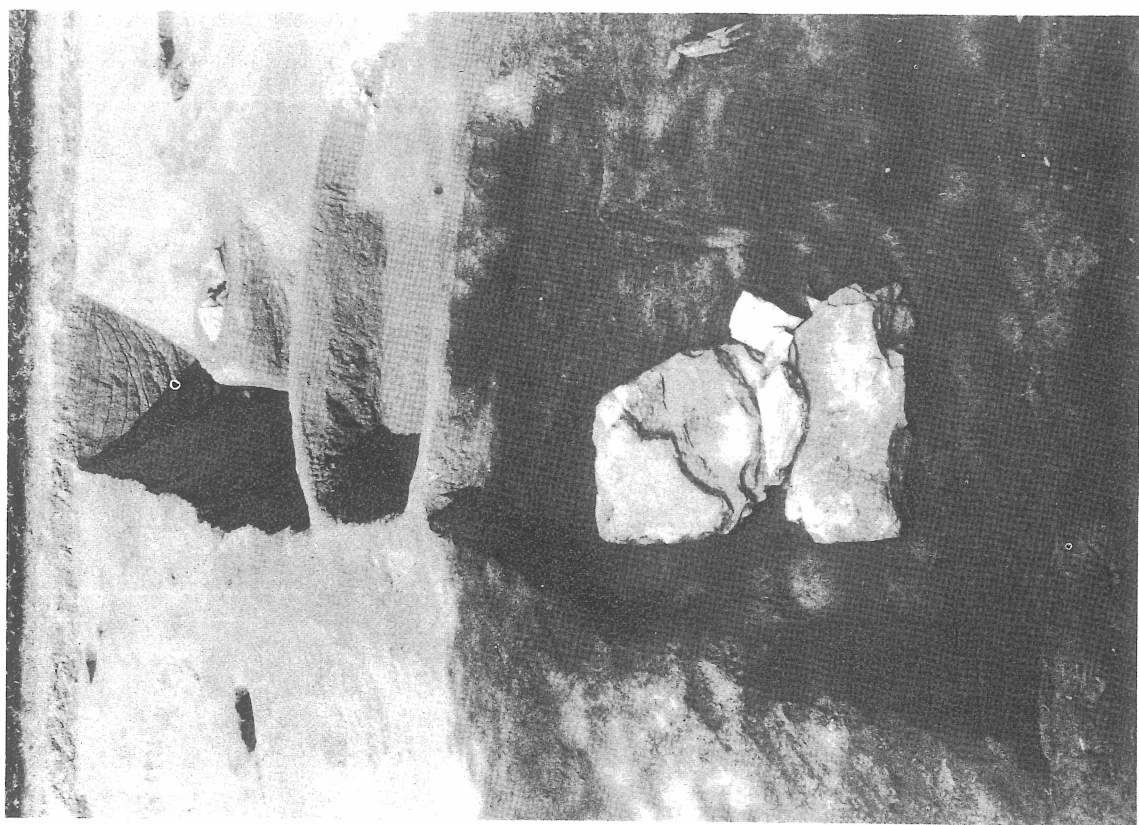
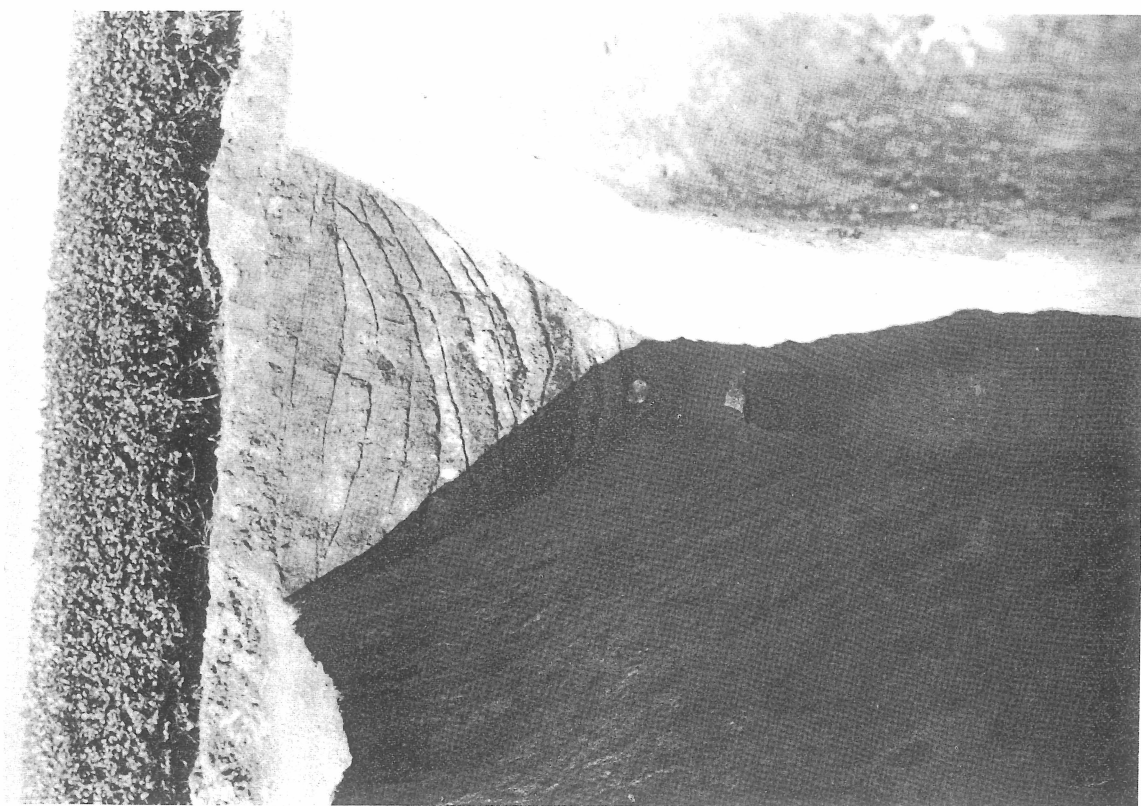
断面がV字を呈する弥生前期後半頃の溝で、これも東西方向に走っている。幅



第18図 出土遺物(石鏃・搔器)④



第19図 出土遺物(石器)実測図⑤(1/2)



れ
遺

み
は
縁
底
で
口
台土
不明

はい
二
ショ



3

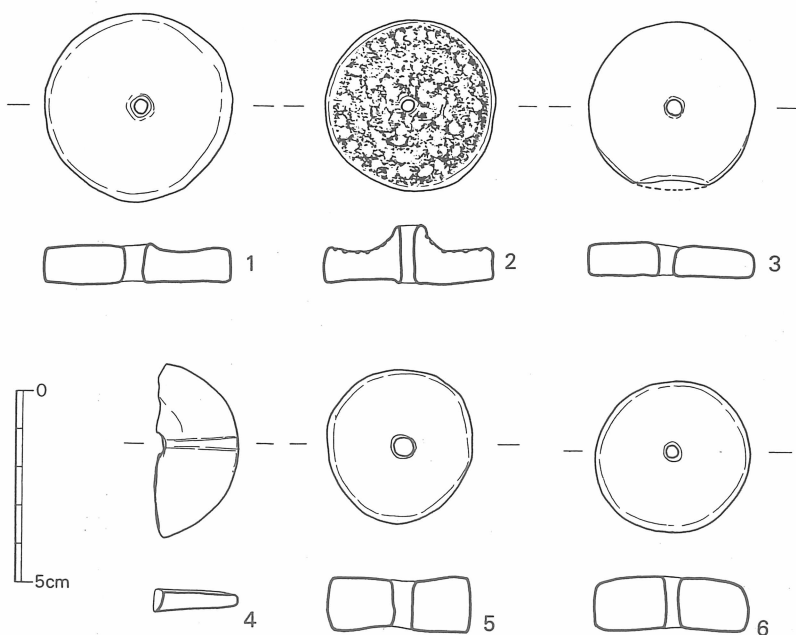
5cm

2)

1.8mで、深さ1.7
m前後を測する。

この溝が埋った段
階に石棺墓・甕棺
墓がつくられてい
る。しかしこのV
字溝は6号住居跡
を切っている。

下層から一括し
た甕を中心とした
遺物が出土してい
る。その中で第17
図⑤は把手付の甕
形土器で珍しい器
形をしていたので
上げてみた。口径



第20図 出土遺物（土製品）実測図⑥（1/2）

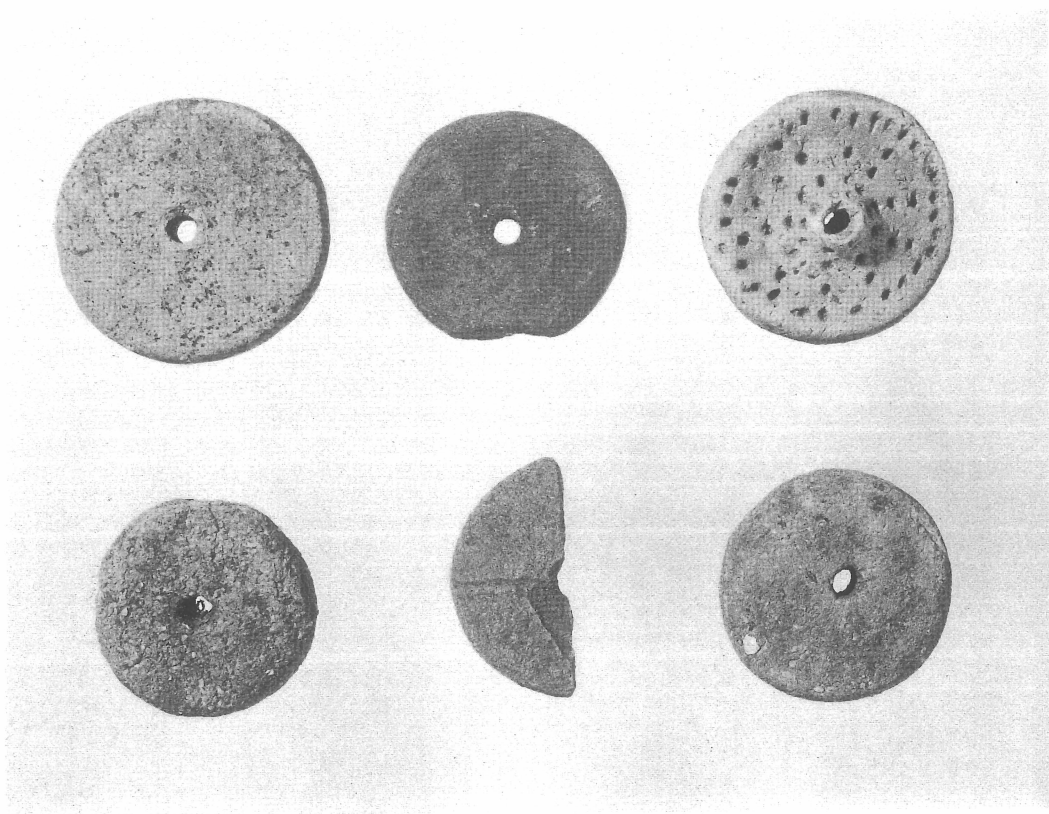
14.3cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色で一部に煤の付着を見る。小破片のため不明であるが把手は対をなすものと考えられる。このような器形の物は糸島郡二丈町の曲田遺跡からも出土している。時期的には相違するが興味深い遺物である。

石器（第19図） ①・③で、両者とも上層から出土している。①は石庖丁である粘板岩製のもので、よく使い込まれたものである。穿孔は両側よりあけている。重量は53gである。③は、打製石鏃で、安山岩製で先端部は欠損している。断面は凸レンズ状を呈している。

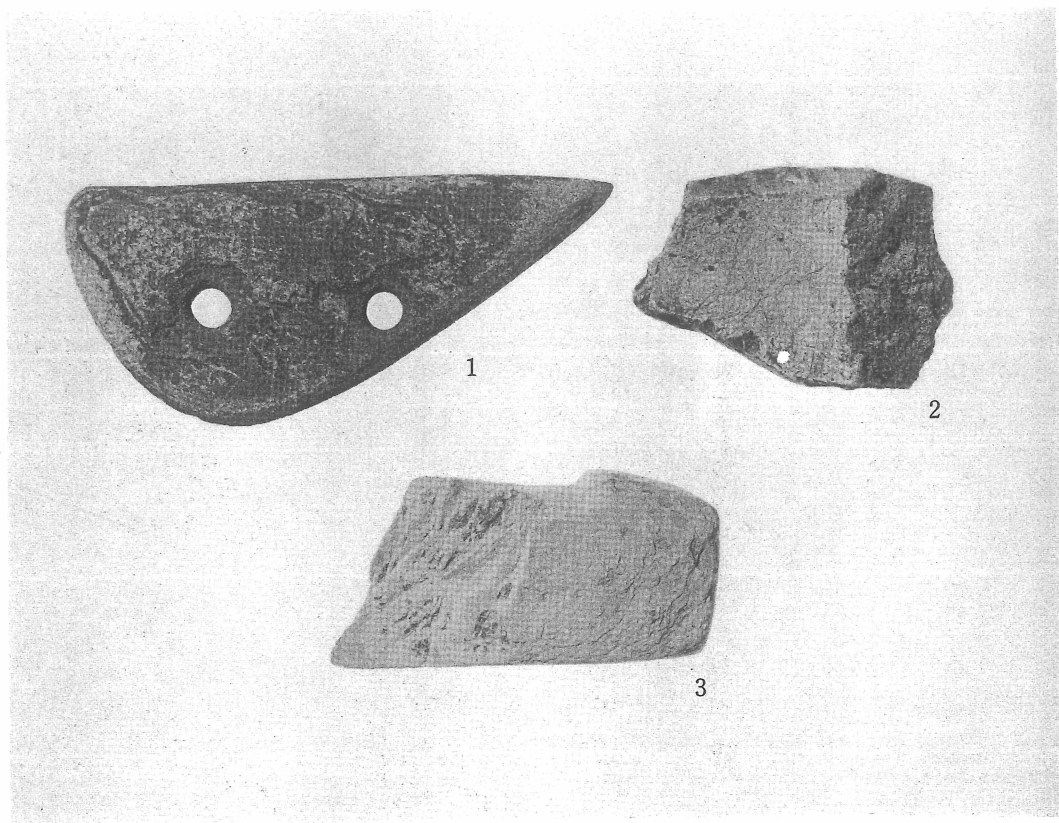
紡錘車（第20図） ①・②・③は下層より出土したもので、全て土製品で①は31.3g、②は23.3g、③は20.8gである。その中でも②は竹による烈点文を配置したもので、興味深いものである。

中世の溝（第7図）

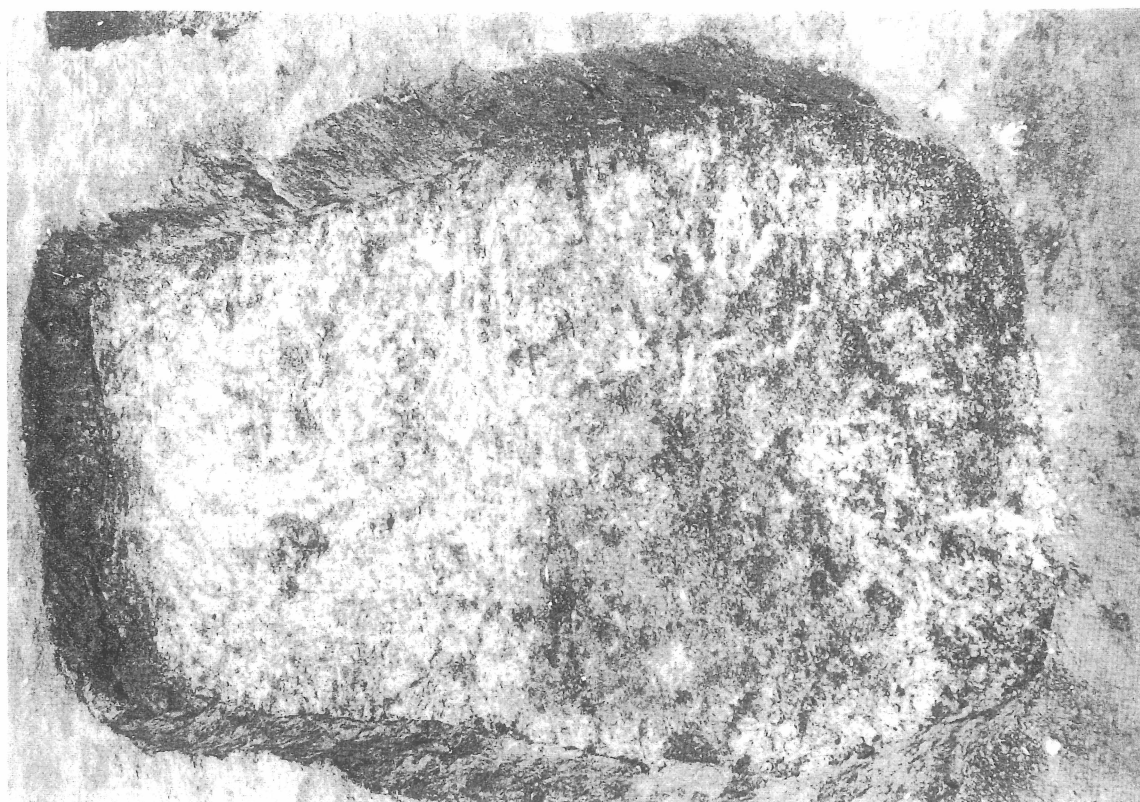
発掘区の中央部にあって、東西方向に走っているが、東側が低く西に行くほど順々に高くなっている。溝の中よりは石鍋・白磁の高台や口縁部等が出土している。中世の時期に水がここを流れていたものと考えられ、パリパリの床面であった。一応中世溝と称しているが、道路の可能性が大である。



(1) 出土遺物(紡錘車)



(2) 出土遺物(石器) 1.石庖丁 2.砥石 3.砥石

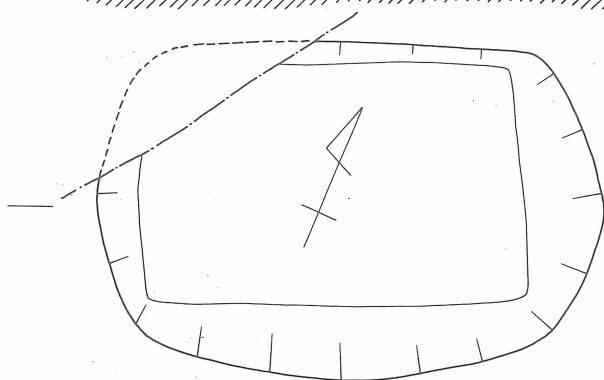
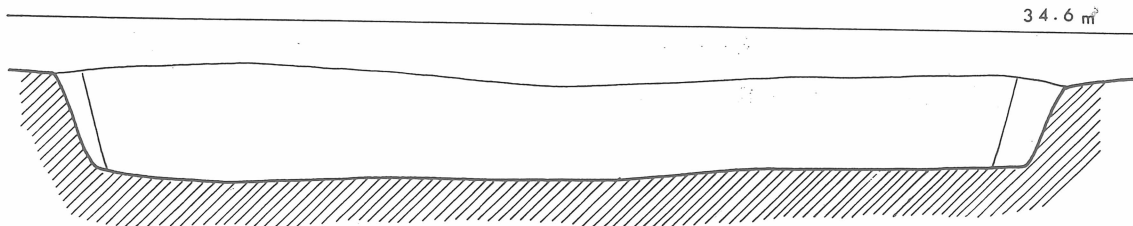
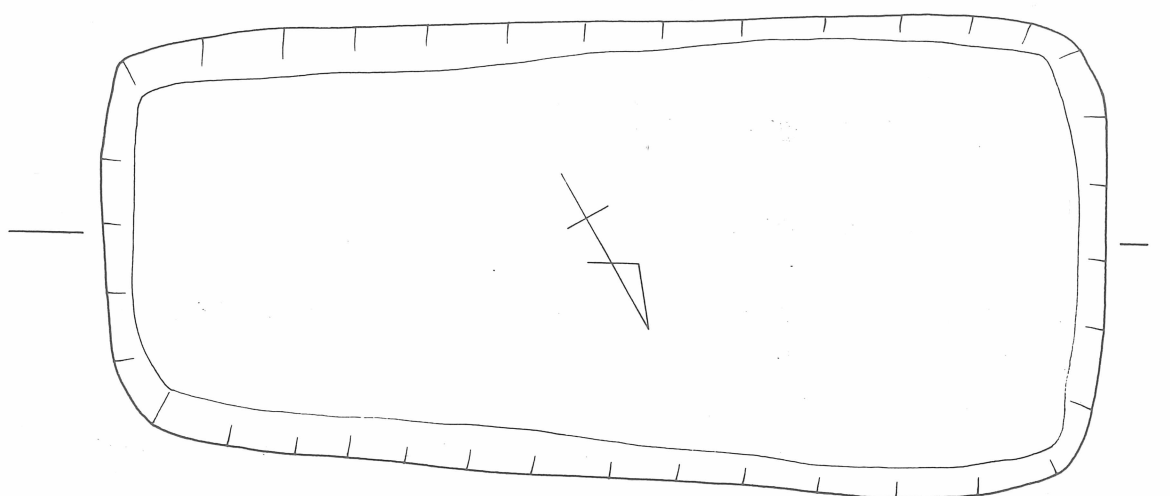


(1) 1号土墳墓近景(西から)



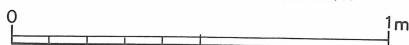
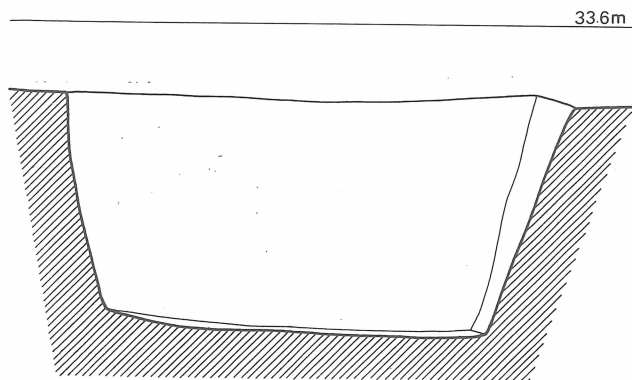
(2) 2号土墳墓近景(南から)

(1) 1号土墳墓近景(西から)



▲ 第 21 図 1号土墳墓実測図(1/20)

(2) 2号土墳墓近景(南から)



◀ 第 22 図 2号土墳墓実測図(1/20)

(5) 土 墳 墓 (第21・22図, 図版 9)

土墳墓と考えられるのは3基である。

1 号土墳墓 (第21図, 図版 9)

平面形が長方形を呈すもので長軸2.5m, 短軸1.2mで, 深さ30cm前後である。主軸をN-58°-Wにとる。副葬品は見られなかった。

2 号土墳墓 (第22図, 図版 9)

平面形は方形に近い長方形を呈し, 長軸1.3m, 短軸0.8mで深さ60cmである。主軸をN-67°-Eで, 副葬品の出土は見られなかった。

3 号土墳墓 (第22図)

平面形は隅丸方形を呈し, 南側を中世の溝で切られている。長軸2.7m, 短軸1mで深さ25cmである。副葬品の検出は見られなかった。主軸はN-62°-Eを示す。

(6) 甕 棺 墓 (第23・26図)

V字溝が埋まった後に甕棺墓がつくられている。このV字溝が弥生前期末までに完全に埋まったと思われる。今回の発掘調査では甕棺の小児棺が1基出土している。

1 号甕棺墓 (第23図)

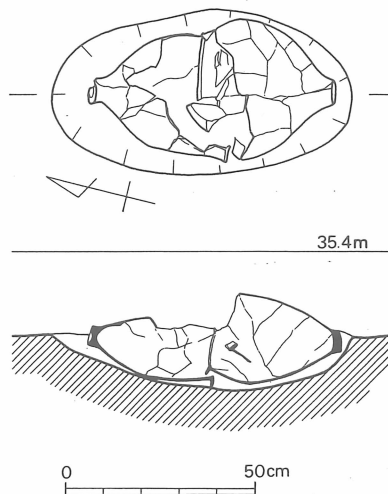
墓壇は楕円形の掘り方で, 甕棺は甕+甕をなしている。ほぼ水平に埋設し覆口式の甕棺墓で主軸をN-13°-Eにとる。副葬品は見られなかった。

甕棺 (第24~26図)

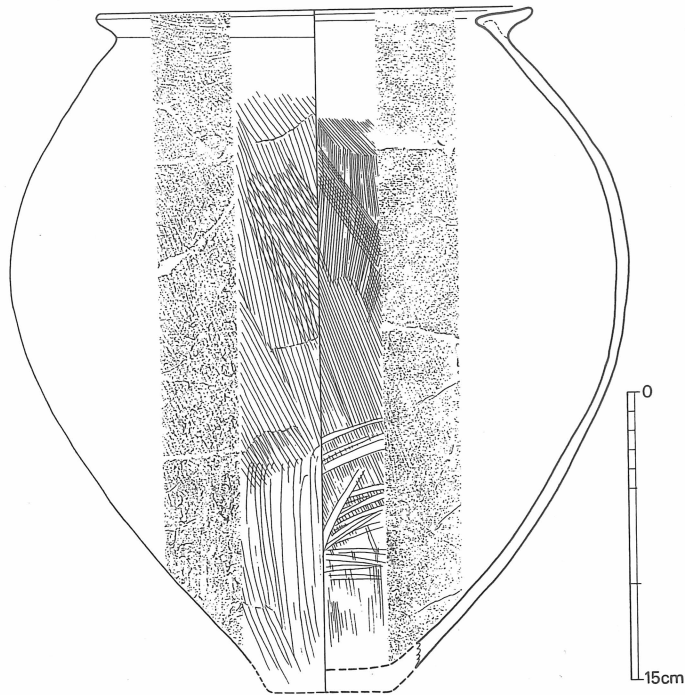
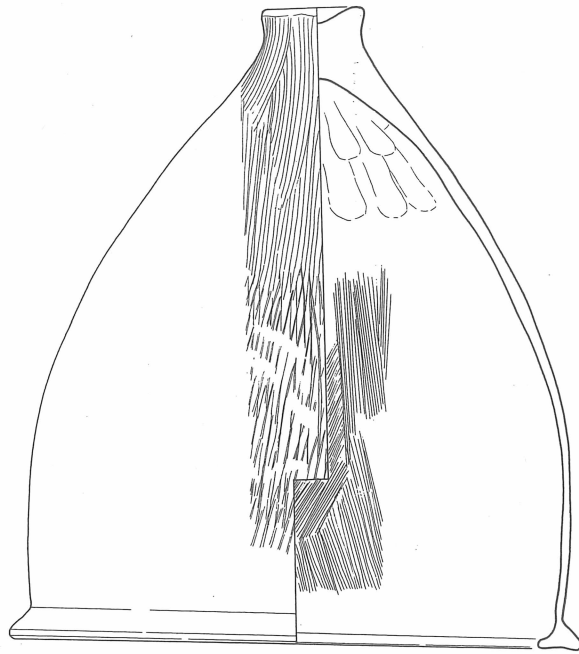
上 甕 (第24図上) 甕形土器で, 口径30.2cm, 底径5.5cm, 器高33.5cmで, 上げ底を呈すもので, 口縁はT字をなしている。器面調整はハケ目の斜行方向, 内面はハケのナデ仕上げで, 底部内面に指圧痕が残っている。胎土に細粒砂を含む。色調は茶褐色である。焼成良好。

下 甕 (第24図下) 甕形土器で, 口径23cmで胸部最大径33.4cm, 器高36cmである。胎土に細粒砂を含み金雲母を含む。色調は茶褐色を呈する。器面調整はハケ目の斜行方向で, 内面もハケ目の斜行方向で, 底部に近い内面はヨコ方向に雑なミガキをかけている。

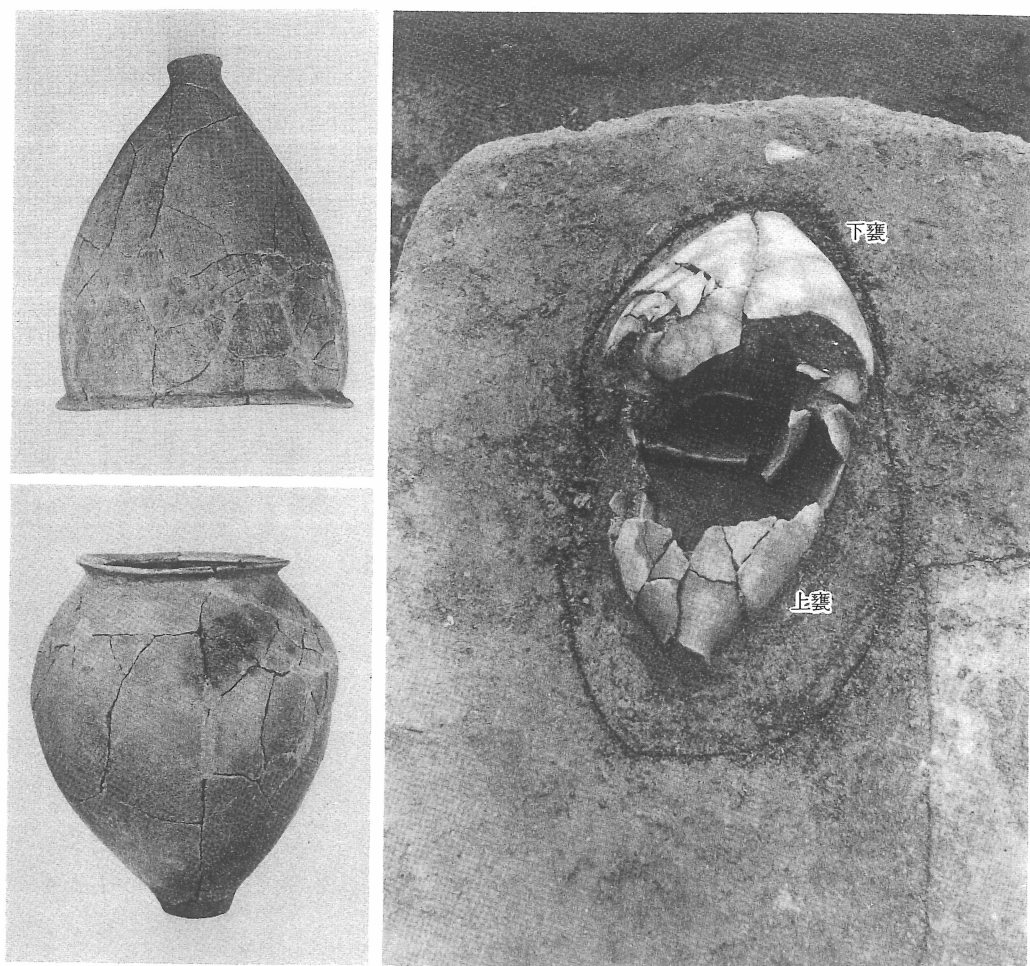
時期的には弥生中期前半の所産であろう。



第 23 図 甕棺墓実測図 (1/20)



第 24 図 出土遺物（甕棺）実測図（1/4）



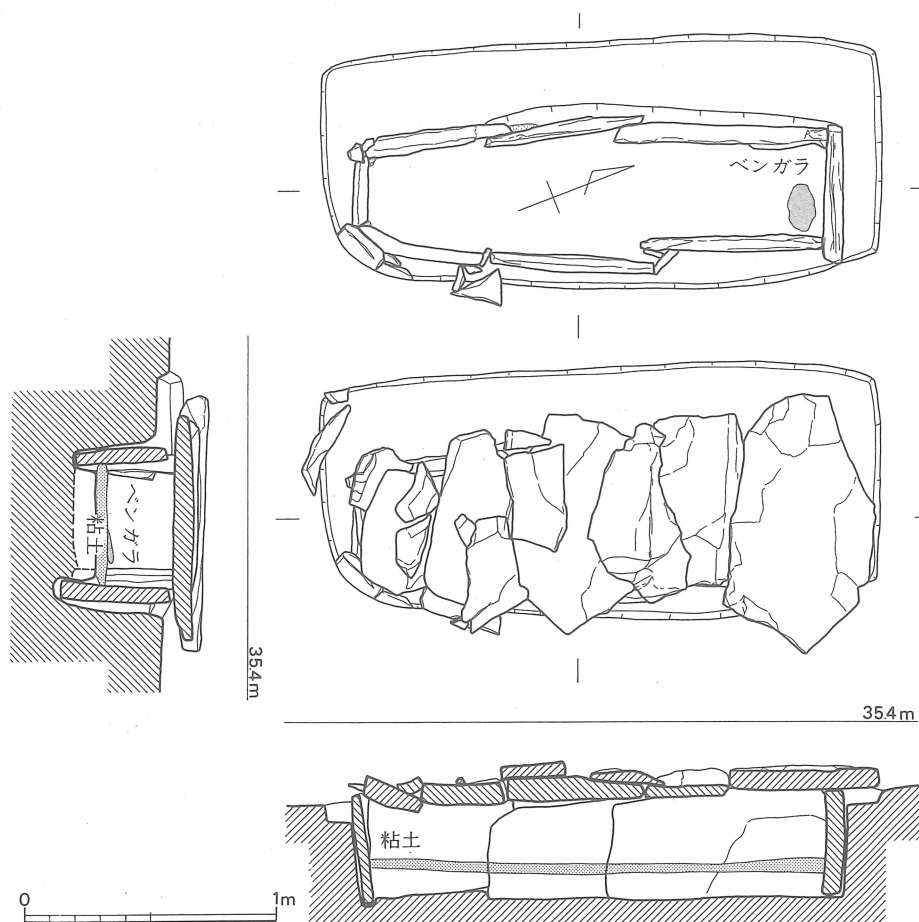
第 25 図 甕 棺 1 号 と 甕 棺 墓 近 景 (北 から)

(7) 石 棺 墓 (第25・26図, 図版10~12)

V字溝が埋まった状態, 以後に石棺墓2基がつくられている。

1号石棺墓 (第26図)

V字溝が埋まった状態以後につくられたもので, 主軸をN-19.5°-Eにとり, 蓋石は9石をもってつくられている。石棺の内法は長さ1.80m, 最大幅40cm, 最小幅35cmで, 頭部にベンガラが残り, その下に粘土が5cm幅でつきかためられていた。石棺の墓壇は楕円形で棺ぎりぎりを45cm前後掘りくぼめて石材を入れて組合わせて, 合わせ目に粘土を使用している。



第 26 図 1 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

2 号石棺墓 (第27図)

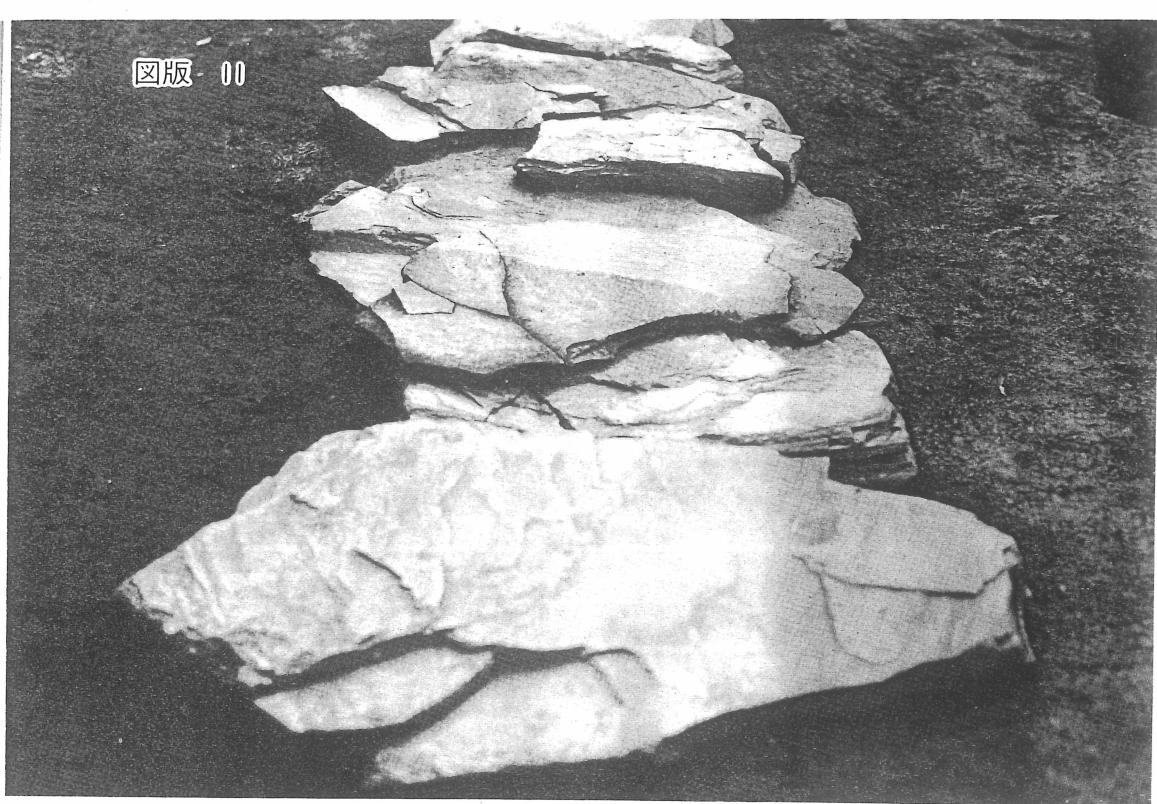
V字溝が埋まった状態の時に作られていたもので、主軸方向はN-66°-Wを示す。完全にV字溝の中に埋没されて作られている。蓋石は3石を使用し、棺の内法は長さ1.60m、幅36cmで、蓋石と床面との空間は30cmであった。埋葬された人骨の一部が検出された。

墓墳の掘り方は棺ぎりぎりに作られていると考えられるが、地山が埋め土であったため墓墳を見出すことができなかった。また頭上の小口部分の石は浮いた様な状態になって発掘された。小口部分から推定すると小口の開閉が簡単にできる構造になっている石棺か、あるいは盗掘にあったかであるが、棺床面は荒らされていないので盗掘を受けた状態でもなかったことはいえる。小口の石にしては重量的にもちこたえられない状態であったことはいえよう。副葬品等の出土は見出せなかった。蓋石・棺材は緑泥片岩を使用している。

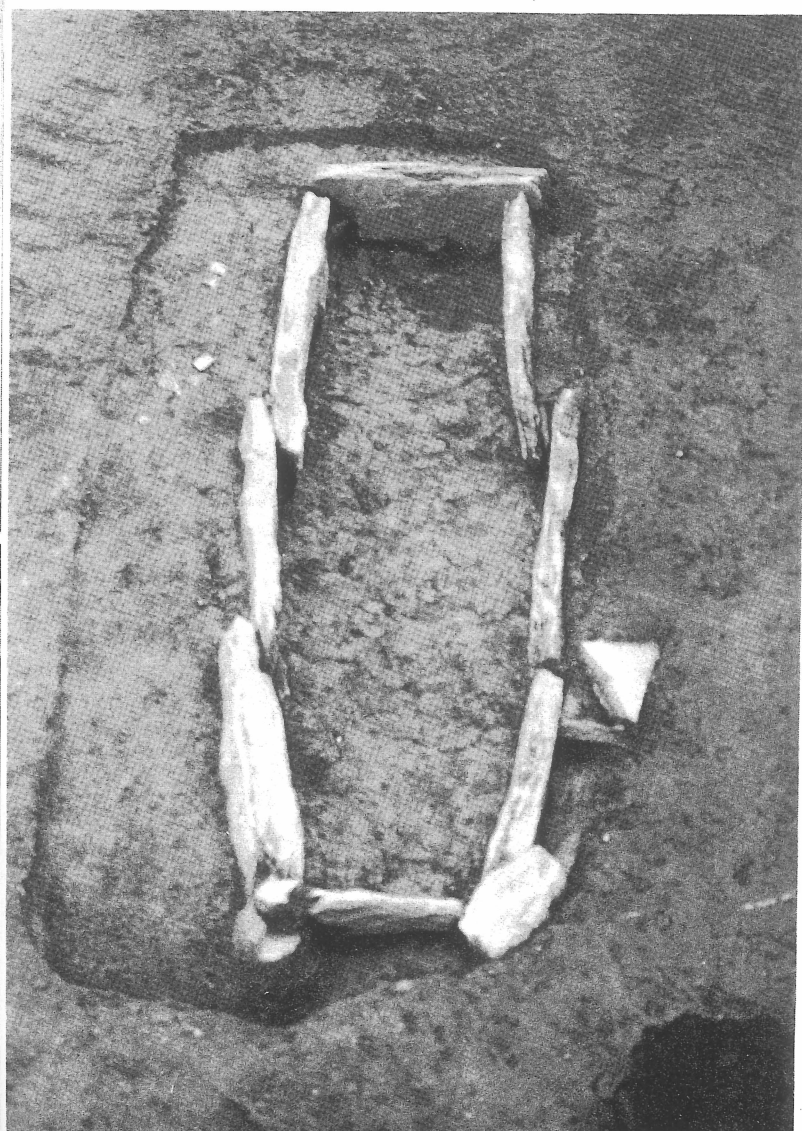


石棺墓と甕棺墓の出土状態

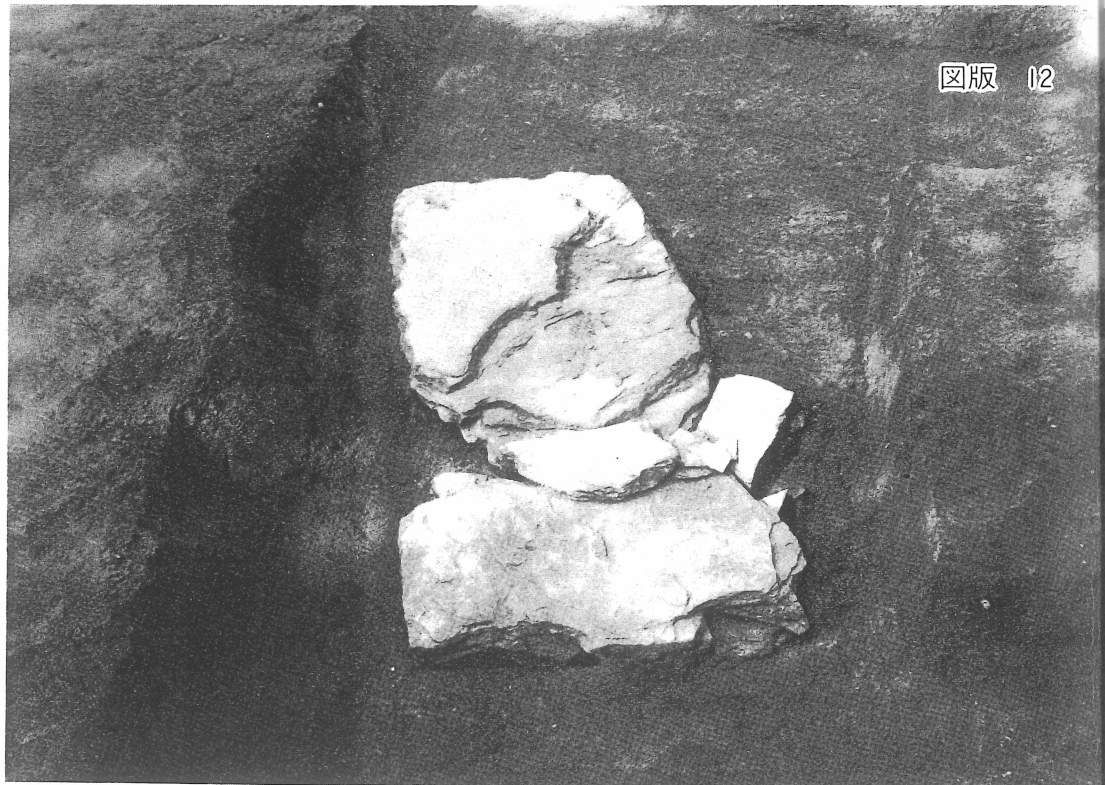
図版 00



▲
1号石棺墓蓋石の状態



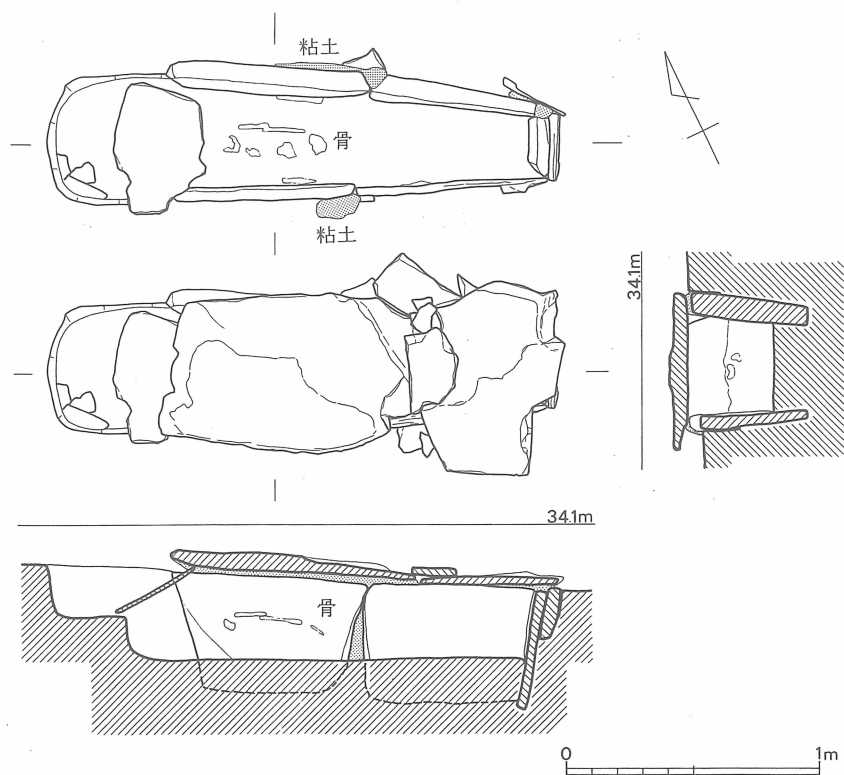
◀ 1号石棺墓全景
(蓋石除去後)



▲
2号石棺墓蓋石の状態



▶
2号石棺墓全景
(蓋石除去後)

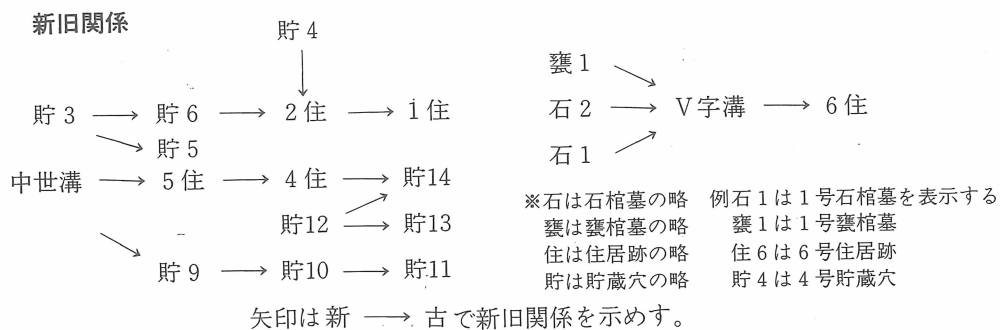


第 27 図 2 号 石 棺 墓 実 測 図 (1/30)

時期的にはV字溝が埋まった弥生中期前半に近い時期のものと推測される。

IV. おわりに

室岡山ノ上遺跡の遺構の切り合い関係を表示すると次の様になる。



このことから時期が決定できるのは、弥生前期後半のV字溝、大濠、5号住居跡、4号貯蔵穴が位置付けられ、1号甕棺墓は弥生中期前半の頃と考えられるわけで、これを基礎として考えると、石棺墓の時期は甕棺墓とそんなに変わらない時期に位置付けられるのではないだろうか。貯蔵穴群にしても弥生前期末から弥生中期前半ということで理解できよう。

この遺跡はこの室岡地区全体に広がるもので、その一部の330㎡について調査を行なったわけである。この狭い範囲の中で、大濠・V字溝がつくられ、その周辺に住居跡がつくられる。大濠やV字溝が埋まり、貯蔵穴群と住居跡群があって、そして甕棺墓と石棺墓を中心にする墓地が台地の端にあらわれる。その後は埋もれて、中世になって、踏わけ道が雨降りの時の水路がわりとなって道が広がっていった。そしてそれも自然にかえり、畑となり桑畑になって、茶畑へと変遷していつていることが発掘調査から理解される。

人間が住むには水利の便が悪く、そのため低地へ定住していったが、弥生時代前・中期にかけての定住の場所としては、この一帯が最高の場所であったと考えられる。湧水地は約50m離れた現在道路端になって断層面より湧水が見られることを考え合わせると、当時としては諸条件に叶った場所と考えてよいであろう。

40m南側の、亀ノ甲遺跡[※]は弥生前・中期を中心とする墓地群と2本溝とで構成され、その実態については不明な点が多い。本遺跡の調査とを絡ませながら、室岡全域に拡がる面的要素が必要となってくるであろう。

この台地を東西方向に横切る様に都市計画道路が予定されていることも聞く。また九州縦貫自動車道のインターにも隣接し、福岡都市圏とは40～50分の通勤圏となり、宅地造成の場所として、交通の便を考えると利用価値の高い地区として今後脚光を浴びるものと言及される。

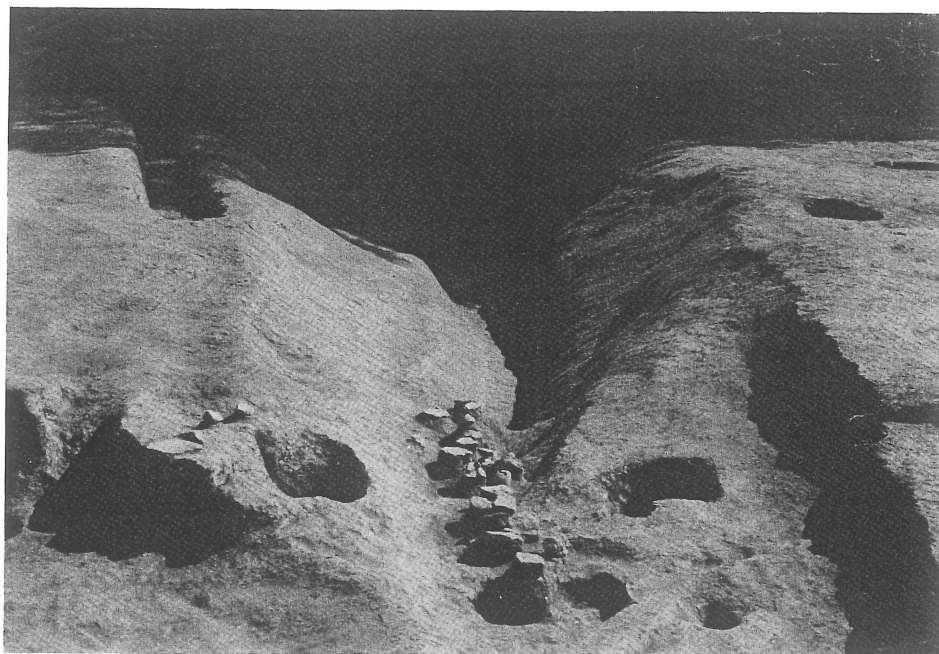
八女市の今後の発展はこの高速自動車道のインターを中心とするこの室岡地区から広がるものと考えられる。その意味からも開発に先達って文化財の保護は必要課題となってくることは明らかな事実である。今後どの様に対応するかが、行政当局にあたえられた責務となろう。



第28図 亀ノ甲遺跡と山ノ上遺跡
弥生時代溝の配置図(1/2,000)

本遺跡の概要は以上述べてきた通りである。遺物の整理も一部しか行っていない現状では、遺構を中心とした報告となってしまったことをお詫びして、後日の宿題としたい。

※亀ノ甲遺跡については、調査担当者であった小田富士雄氏より、発掘調査資料及び助言を得た。記して感謝の念を表す。



第 29 図 中 世 溝 (道?)

室岡山ノ上遺跡

八女市文化財調査報告書 第8集

昭和57年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647番地

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

